

現代人間論系への進級を検討しているみなさんへ

2015年11月12日(木) 12:15~12:55

目次:

はじめに	1
現代人間論系専任教員紹介	2
2015年度開講授業 講義(一例)	17
2015年度開講授業 専門演習(一例)	20
2015年度開講授業 ゼミ	24
2015年度時間割	28
2014年度卒研・ゼミ論一覧	30
現代人間論系室より	32

新2年生向け 現代人間論系 進級ガイダンス資料

お問い合わせ：現代人間論系室（33 号館701教室）

TEL：03-5286-3558

E-mail：human@list.waseda.jp

担当：小藪、畑山、酒井

現代人間論系HP：http://www.waseda.jp/gendainingen/

現代人間論系

現代を「ともに生きる」人間のあり方を研究

人間とは何か。

古来より、この問いはあらゆる学問が抱えてきた究極の命題です。とりわけ、価値観が多様化し、人間を取り巻くあらゆる事象が複雑化・多元化する現代社会においては、人間の本質を探り、「私」自身のアイデンティティを確認することはもっとも大きな課題であるといえるでしょう。しかし、物質や情報の豊かさと裏腹に、人と人、人と社会との関係が希薄化しつつある現代を生きる人々が、その答えを見出すことは容易ではありません。

こうした問題意識に立ち、人間に対する多面的なアプローチを通じて、現代社会の諸問題に立ち向かうたくましい教養を備えた人材を育てることが、本論系の目的です。そのために各プログラムを貫く共通のテーマを「ともに生きる」とし、「生き方」や「心」「人との関係」といった、私たちが日常的に突き当たる問題に切り込んでいきます。その特色は次の3点です。第1に社会学、心理学、文学、哲学、倫理学、宗教学、教育学、社会福祉学などを基盤としながらも、その枠組みを超えて学際的・総合的にアプローチします。第2に、問題解決の軸足を「現代」に定め、現代人の精神構造や倫理、コミュニケーション、人生などについて探究します。第3に、少子高齢化や環境問題、企業倫理や子育て、心の問題とセラピーなど、具体的な諸課題を念頭に、その解決を模索しながら思考と論究を深めていきます。

このように本論系は、現代人と現代社会の諸問題に新しい視点で向き合う教育研究の場であり、多彩な科目群と教授陣、ゼミ活動やフィールドワークなどがこれを支えています。

※大学公式ホームページより



みなさんこんにちは。

現代人間論系ってどんなところでしょうか？

このパンフレットでは、現代人間論系について、すこし知っている・あまり知らないという方にも参考になる情報を掲載しています。

- 2015年度、現代人間論系で開講している講義・演習・ゼミについて。これらは一例です。関心のあるキーワードを探してみてください。
- 専任の先生方について。先生方からのメッセージもあります。
- 意外と知られていない(?) HP・ブログの活用方法について。

すこしでも気になったところはぜひ気軽に相談してください。

現代人間論系室は 33 号館 7 階 701 号室にあります (写真左)。

開室時間中、助教・助手がみなさんからの相談を受け付けています。



安藤 文人
あんど う ふみひと

岐阜県岐阜市出身。趣味は、スポーツ観戦。最近は水族館にはまりつつあります。

専門分野

ナラティブ・スタディーズ、比較文学

担当科目

ゼミ「ナラティブ研究」、演習「人物と言説」

研究紹介

夏目漱石の『吾輩は猫である』を漱石のセルフ・ナラティブという側面から研究しています。平行してナラティブの構築の過程で、既存のナラティブが果たす役割を、自伝や災害の体験記録から探る試みを始めました。

現代人間論系への誘い

私の専門はいわゆる「文学」ですが、文学研究のための文学研究をするつもりはありません。あくまでそれは、「人間研究」の方法です。現代人間論系は、真っ直ぐに「いま、ここで、人間が生きること」について考えたいと思う人にとって、もっともふさわしい場所であると思います。

ゼミ・演習紹介

ゼミ・演習では、人間が生きて行く中で、言葉はどのような関わり方をし、どのような役割を果たすのか、ということを考えていきます。文学作品や自伝、伝記などから新聞・雑誌記事、ブログやツイッターまで、様々な「言葉」を取り上げていきます。

個人HP

[安藤文人研究室](#)

Mail

fando111@waseda.jp
(*を半角@に変えて入力してください)

研究室

33号館1307

石田 光規 いしだ みつのり 3日間くらい引きこもるように研究し、1日ばーっと発散するというサイクルで生活できるとこのうえなく幸せに感じます。	専門分野
	社会学（ネットワーク論、人間関係論）
	担当科目
	親密圏の論理と倫理、コミュニケーション論、社会の変化と人間関係（ゼミ）ほか
	研究紹介
	人びとの人間関係について社会学的な視点から分析しています。人間関係においてココロがとりわけ重視されるようになったのはなぜなのか、“つながりづくり”は果たしてうまくいくのか、孤立は回避できるのか、といった問題関心を軸に研究を進めています。
	現代人間論系への誘い
人間関係の実相を探っていくと、社会学のみならず、心理学、倫理学、福祉学などさまざまな視点が必要になってまいります。たとえば、個人の選択・決定をどこまで許容するかという倫理的な問題は、現在の関係性に大きな影響を与えています。人びとの関係性をさまざまな視点から捉え直し、善き社会とは何か一緒に考えて参りましょう。	ゼミ・演習紹介
社会の変化と人間関係をテーマに、今後の関係構築、関係形成、善き社会のあり方について考察してゆきます。そのさい、特定の領域に絞り実証的に調査をしつつ、問題に迫るアプローチをとります。	個人HP
なし	Mail
ishida*waseda.jp （*を半角@に変えて入力してください）	研究室
33号館1301	



大久保 孝治
おおくぼ たかじ

出身地：
東京都大田区蒲田

出身高校：
都立小山台高校

趣味：
散歩、読書、映画・音楽・美術・TVドラマ鑑賞、写真、俳句

好物：
とんかつ、蕎麦、珈琲、クリームソーダ

専門分野

社会学

担当科目

講義：ライフストーリーの社会学、日常生活の社会学、現代人のライフスタイル
演習：個人化の社会学

研究紹介

現代社会における個人と個人の関係、個人と集団との関係、個人と全体社会との関係を社会学の視点から探求しています…と書くとき硬い感じがしますが、要するに、現代人の日常生活のさまざまな場면을フィールドにして、そこで繰り広げられる人々の相互作用（コミュニケーション）のあり方を観察し、社会学的な概念や理論によって記述・説明しようとしています。

現代人間論系への誘い

現代社会では、個人と集団との関係の希薄化（個人化）やパーソナル・メディアの発達・普及によって、個人のアイデンティティが多分化し、個人と個人の関係は部分的なものになっている（なっていく）と言われています。こうした状況は個人に自由と不安をもたらす、社会に流動性と不均衡をもたらします。何ごとにも明るい面と暗い面があるわけで、明と暗の両方に目を向けながら、われわれの時代を生き抜いていくための方法論について考えていきませんか。

ゼミ・演習紹介

ゼミ「現代人のライフストーリー」では、一般の人々へのライフストーリーインタビューを通して、現代人が直面している人生問題について社会学的な考察を行っていきます。

個人HP

[大久保孝治研究室](#)

Mail

ohkubo*waseda.jp
（*を半角@に変えて入力してください）

研究室

39号館3階2318



大藪 泰
おおやぶ やすし

神戸生まれの名古屋育ち、学生時代は野球に明け暮れました。その縁で、自分がOBでもある早稲田大学軟式野球部会長をしており、ゼミ生との縁で、アカペラサークルChoco Crunchの会長もしています。

専門分野

発達心理学、乳幼児心理学

担当科目

子どもの発達心理学、人間の発達と文化、子どもの行動観察法、発達の生得性と環境効果など

研究紹介

乳児がもつ生物としての「ヒトのココロ」が、文化を獲得した「人間の心」に変容する過程を研究しています。「人間の心」を発生させる原動力は他者との共有世界の構築力にあるという仮説をもち、最近では子どもの共同注意、静観能力、情動共有、模倣行動に注目しています。心の発生の視点から、乳児の心の世界を体系的に整理することを目指しています。

現代人間論系への誘い

人間の心の仕組みや営みを心理学という限られた視点ではなく、哲学、社会学、教育学、社会福祉学、文学、精神医学など多様な視点から捉え、心の世界を描き出そうという意欲がある諸君に最適な論系です。実生活に根ざした人間論を展開したい人、人間の心の世界を進化の視点と文化の視点から幅広く理解したい人、また社会との葛藤を経験し孤立に悩む人間がもつ生きる意味とは何かを考えたい人は、是非この現代人間論系に進んでください。

ゼミ・演習紹介

ゼミでは、子どもの人との関係性の発達に関する研究テーマを扱います。4つの主要な視点を重視します。健常児の発達の視点と発達障害児の発達の視点、そして進化の視点と文化の視点です。具体的な検討課題はゼミ生の皆さんと一緒に考えましょう。恒例になった夏と冬の2回のゼミ合宿は、ゼミ生が主体の楽しいメイン行事です。プレイルームでの行動観察体験や保育所などで子どもとの接触体験をもっていただく予定です。

個人HP

Mail

oyabu@waseda.jp
(*を半角@に変えて入力してください)

研究室

33号館1309



岡部 耕典
おかべ こうすけ

ポスト団塊／オイルショック世代、京都生まれの東京育ちのマージナルマンです。

専門分野

福祉社会論、福祉社会学、障害学

担当科目

ゼミ：ディスアビリティと現代

演習：現代人と福祉、福祉社会の臨界（新）

講義：障害学、福祉社会論（新）、現代人間論系総合講座2(生命の尊厳と生活の質)

研究紹介

公共／交響する福祉社会の在り方とそのために必要な〈新たな福祉のかたち〉について考え／書いています。

主なテーマとして、障害者の自立生活とパーソナルアシスタンス／ダイレクトペイメント、排除に抗し自由と両立する社会（福祉）政策／社会理論、当事者のガバナンスとセルフ・アドボカシーなど。

主著書に、「障害者自立支援法とケアの自律」、「ポスト障害者自立支援法の福祉政策」（明石書店）、共著に、「良い支援？」（生活書院）など。共同編集している雑誌「支援」（生活書院）もどうぞよろしく。

現代人間論系への誘い

まなざすのではなく聴き発する問いこそが自足する「明晰」の世界を突き崩し、自らの生き方の〈窓〉をひらきます。「現代」をsurviveしていくためのしなやかでたくましい叡智を身につけてください。

ゼミ・演習紹介

「障害(disability)は社会的に構築されている（個人の属性ではない）」という考え方を「障害の社会モデル」と呼びます。

私が担当する「ディスアビリティと現代」ゼミでは、「障害の社会モデル」を手がかりとし、加速する新自由主義と閉塞する福祉国家を交響する公共圏へと再構築するために必要な「自由の平等」と新たな福祉のかたち（ケア・運動・政策・制度的再分配）について、読み／調べ／考えていきます。

個人HP

岡部耕典研究室

★これまでのゼミ論文が全文掲載されています。

Mail

k_okabe@waseda.jp

（＊を半角@に変えて入力してください）

研究室

33号館1306



小塩 真司
おしお あつし

愛知県出身。愛知県立一宮西高等学校卒業、名古屋大学大学院修了。中部大学を経て、2012年より早稲田大学へ。

専門分野

発達心理学，パーソナリティ心理学

担当科目

人間発達論ゼミ（現代人の心理），大人の発達心理学，個性の発達と差異，演習（現代社会とセラピー文化），演習（現代人のアイデンティティの心理）など

研究紹介

人間の心理学的個人差とその発達について研究しています。研究業績については、研究室webサイトの[研究業績一覧](#)を参照してください。

現代人間論系への誘い

現代人間論系はまさに「人間」について探求する場です。人間としての不思議さや悩みや苦しみ，楽しさなど，どのような問題意識でも，様々なアプローチから取り組むことができます。現代人間論系で，ぜひ幅広い視点を身につけてほしいと思います。

ゼミ・演習紹介

小塩ゼミでは心理学の研究方法を用いて，現代に生きる人々にまつわるさまざまな問題にアプローチします。ゼミでの活動を通じて，自分で問題を設定し，仮説を立ててそれを検証していく一連のプロセスを体験してもらいたいと思っています。多くのゼミ生は，研究の過程でデータ解析を扱うことを経験しています。ゼミ論文集がカンファレンス室にありますので，興味のある人は手にとってみてください。

個人HP

[早稲田大学 小塩真司研究室](#)

Mail

oshio.at@waseda.jp

（＊を半角@に変えて入力してください）

研究室

33号館1305



草野 慶子
くさの けいこ

東京都出身。趣味はバレエ鑑賞とプロ野球観戦。

専門分野

20世紀ロシア文学

担当科目

ゼミ「ジェンダーとセクシュアリティの視座」、演習「不死の様式」、演習「生の詩学/生の解釈」、講義「ユートピアと性」*
ただし演習2科目は2013年度より

研究紹介

私の専門は、伝統的な学問の区分けに従えば、20世紀初頭のロシア文学、芸術、思想です。また、地域と時代、言語にとらわれない区分で言えば、近年はとくに、ジェンダー研究、セクシュアリティ研究の領域に関心を深めています。

現代人間論系への誘い

現代人間論系では、ジェンダー研究、セクシュアリティ研究の領域で、学生の皆さんと出会えることを楽しみにしています。

ゼミ・演習紹介

上に書きました通り、ゼミには主に、ジェンダー研究、セクシュアリティ研究に関心を持つ学生の皆さんの参加をお待ちしています。演習はもうちょっと、文学ブンガクしている・・・はずなのですが、受講者の皆さんの関心領域にひっぱられて、どんどんずれていくのも楽しみです。

個人HP

Mail

kusano13*waseda.jp

(*を半角@に変えて入力してください)

研究室

39号館2605



田島 照久
たじま てるひさ

毎週近くのスイミングスクールで泳いでいます。水泳はメンタルなスポーツですね。泳ぎながら半分眠ったようになるときもあります。

専門分野

宗教哲学・宗教学、特にドイツ神秘思想、他に、キリスト教の祝祭と民間習俗、キリスト教図像学、禅思想研究にも関心があります。

担当科目

ゼミ「聖性文化論」、講義科目「宗教思想」「宗教学1・2」「キリスト教と祝祭」、演習科目「宗教と共同体」

研究紹介

宗教とは「自己理解」であると思います。自己の根源は自己自身を超えています、それは同時に自己の内にあるという中世の思想家エックハルトに深い関心を寄せています。科学的思考や世俗化が隔々にまで行き渡った現代社会で、自己理解である宗教はどのような言説として可能かを考えています。

現代人間論系への誘い

現代人間論系は人間の本質を哲学、文学、心理学、社会学といった領域から様々な観点を通じて探るという理想的なコンセプトを用意しています。漠然と感じている関心テーマを具体的な研究へと繋げて行くのに最適な論系です。

ゼミ・演習紹介

近代以降の社会は人類が初めて経験する「非聖化された社会」であるといわれます。私たち現代人にとっては科学的思考がものを考える根本枠組みとなっていますが、そうした科学的知見のたどり着いた結論の一つは、すべての出来事には必然的因果関係に縛られない不確定性、偶然性があるということでありました。こうした科学的知見は伝統的宗教に対して、これまでの必然的全知という神概念を撤回する必要性を突き付けるものであるとされます。

われわれはこうした生の偶然性の中で、それでもこの世界が調和ある見通しのきく安全な世界であってほしいと願い、そうしたコスモス願望に突き動かされて「聖なるもの」を立て、この「聖なるもの」との交流を通じて生を充実したものとして意味づけようとしてきました。

こうした遺産が神話や伝承、民間習俗や祭りであり、あるいは宗教美術・音楽・文学といった芸術的な表象であり、また宗教の規範的在り方を探る宗教哲学・思想的言説であるといえます。そういった「聖なるもの」との多様なかわりから文化を見てみようとするのがこのゼミの主旨です。

個人HP

Mail

tajima@waseda.jp
(*を半角@に変えて入力してください)

研究室

33号館1311



増山 均

ましやま ひとし

趣味は内外の旅行、旨いもの探索、冬はスキーなど。いま竹の魅力にとり憑かれ遊びで「竹の研究」に凝っています（『子育ての知恵は竹林にあった』柏書房）。栃木県の田舎に住んでいますので、四季折々の自然の恵みのなかで生活しています。みなさん、遊びにきて下さい。竹の魅力と旨いものを紹介します。

専門分野

社会福祉学、社会教育学、児童文化論

担当科目

児童福祉論、教育福祉論、子どもの福祉と子育て支援

研究紹介

社会福祉、社会教育、児童文化の多方面から子どもの育ちを検討し、子どもの発達や子育て文化の問題を研究しています。自治体やNPO/NGOの子育て支援活動や、教育・福祉計画の調査などのフィールドワークも行っています。

現代人間論系への誘い

80歳まで生きられるようになった現代社会、人生のどの時期をとっても福祉に関わる課題と出会います。激動する社会を見つめ、幸せな人生を切り開くためにも、「現代人間論系」で、＜社会＞と＜人間＞と＜福祉＞を総合的に学んでください。この論系には、人間・社会・文化の研究に多面的にアプローチしている先生方が集まっているので、学生の皆さんも加えて、相互のコラボレーションによって、＜新しい何か＞が生み出されるといいですね。

ゼミ・演習紹介

福祉社会論プログラムにて、児童福祉論を担当するとともに、ゼミナールのテーマは「教育福祉・福祉文化論」を担当します。少子化にともなう子どもの問題と高齢化にともなうお年寄りの問題を、分断された別個の問題として見るのではなく、家族・地域・社会において統一的にとらえていくにはどうすればよいか、世代間交流や社会的ネットワークづくりに注目しながら考えていきます。東京都中野区の生涯学習大学の高齢者の方々と早稲田のゼミ生との合同ゼミナールを開催しています。また、板橋区の社会教育会館を会場にして「子どものための地域文化施設フル活用術」などの講座をゼミ生と一緒に開催しています。

個人HP

Mail

massy*waseda.jp

（＊を半角@に変えて入力してください）

研究室

33号館1303



御子柴 善之
みこしば よしゆき

長野県出身。大学一年の演習ではカモシカと人間の共生を取り上げました。自宅では、妻と猫（名前はソフィー）とともに生きています。

専門分野

倫理学、カント哲学を中心としたドイツ近現代哲学

担当科目

倫理学（１、２）、社会倫理学、近代的人間観の論理と倫理、社会福祉の論理と倫理 他

研究紹介

学生時代からカント哲学の研究をしてきました。18世紀のカント哲学が提起する問題は現代の哲学的問題にも通じています。そこで、現在は、カント倫理学をひとつの手がかりとして、現代社会の諸問題と向かい合い、尊厳ある人間の連帯を原理とする社会倫理学（カント的社会倫理学）を構想しています。倫理学もまた哲学の一分野です。私たちが日常あたりまえと思っていることがらに正面から問いを發します。私もこれまで「誠実さ」「善意」「尊厳」「人権」などのことがらを問題にし、それを手がかりに環境問題対策、ボランティア活動、介護福祉、難民問題などについて考えてきました。

現代人間論系への誘い

「人間は理性的動物である」、「人間は未確定動物である」、「人間とは否と言えらるものである」などなど、古来、哲学者たちは「人間とは何か」という問いを立て、それに答えてきました。現代社会において諸問題に直面しつつ生きるみなさん自身は、「人間とは」という問いにどのような答えを見出すでしょうか。その手がかりを与えようとするのが、現代人間論系です。

ゼミ・演習紹介

演習「近代的人間観の論理と倫理」では、「近代的人間観にはどのような特色があるのか」という問いを中心に、近代的人間像とその限界を考えます。演習「社会福祉の論理と倫理」では、「ケアとは何をする事なのか」という問いを立て、ケアという関係のもつ倫理的問題を考えます。ゼミ「プラクティカル・エシックス」は、現代社会の問題について、そのどこが「問題」なのかを明らかにしつつ、その解決を諦めることなく、といって技術論に走るのではなく、ひたすら批判的に議論を行います。

個人HP

御子柴善之の研究室

Mail

mikoyuki*waseda.jp
（＊を半角@に変えて入力してください）

研究室

33号館1313



村松 聡
むらまつ あきら

学生の皆さんと、おいしい酒を飲んで、いいものを食べ、心地よいおしゃべりと議論ができれば幸いです。

専門分野

近現代哲学、倫理学

担当科目

講義：「応用倫理学」、「生命倫理」、演習：「道德意識の研究」、「現代人間観の論理と倫理」、「実存と他者の倫理」など、ゼミ：「生命と人格」

研究紹介

専門は、近現代哲学、倫理学、そして生命倫理などの応用倫理学です。現在は、人格理解を中心に、人間とは何か、哲学的観点から考えています。とくに身体、他者理解がその鍵となっていると思って研究しています。倫理学の分野では、リベラリズムを超える倫理のあり方を考える必要性を感じています。また、ヒトゲノムの扱い、インフォームド・コンセント、職能者の情報開示のあり方など広く情報をどのように扱うか、その開示と管理の問題にも関心をもっています。

現代人間論系への誘い

21世紀は、ITとバイオテクノロジーの時代と言われています。遺伝子操作やInternetによる急激な環境の変化に直面して、人間の身体とは何か、環境や他者との関係とは何か、現代に生きる私たちは問われています。皆さんも、私たちと一緒に現代人間論系で「人間とは何か」考えませんか。

ゼミ・演習紹介

ゼミでは、生命倫理を中心として、人間とはなにか、を探究していきますが、二つのことを心がけています。まず、哲学的な深さを体得すること。そして、同時に、現実の問題に対する広いアンテナと関心をもつこと。深く、広く、欲張ったゼミにしたい、と思っています。

個人HP

Mail

akira-muramatsu@waseda.jp
（＊を半角@に変えて入力してください）

研究室

33号館1302

新任教員	専門分野
	クィア・スタディーズ
	担当科目
	ゼミ：精神文化論ゼミ（クィア・スタディーズ）
	研究紹介
	（ゼミ紹介文より） 多様な性と身体のあり方は、社会において序列化された形で配置され、それゆえに女性やセクシュアル・マイノリティは時に生存の危機においやられます。このような性をめぐる社会的現実を批判的に考察する知の総体がクィア・スタディーズです。社会制度に組み込まれた差別、個人における心的かつ身体的な現象としての性的欲望・快楽、アイデンティティ・ポリティクスのは非などを検討しつつ、現代社会の存立を下支えする性という現象の実像を明らかにし、多様な人々がともに生きられるものへと社会を組み換えていく方途を探ることが、（大げさに言えば）このゼミの目的です。 とは言え、多くの学生にとってはクィア・スタディーズはなじみのない学問分野でしょう。ですから、ゼミでおこなっていく作業は大体こんなものだと思ってください。「性について、調べて分析して誠実に考えてみる」「この社会におけるさまざまなマイノリティ（少数派）の置かれている苦境を調べて分析して誠実に考えてみる」。性を恥やからかいの対象としてでなくまじめに面白がり、その先にこの社会の公正さを構想する、そんな営みを地道にやっていくことになるはずです。 一点補足です。クィア・スタディーズは学際的（＝分野横断的）な学問分野です。担当教員の専門は社会学ですが、ゼミ生はどのような学問分野を専門としていてもかまいません。むしろ、様々な学問分野の流儀や方法論を持ち寄って、新しく面白い知見を生み出すことも、このゼミの醍醐味だと思ってください。
	現代人間論系への誘い
	ゼミ・演習紹介
	クィア・スタディーズという学問はその学際性ゆえ広い範囲の研究対象をカバーします。そのため、授業の内容は出席者の専門分野や研究テーマによって大きく変動します。逆に言うと、ひとりひとりの受講生が何らかの意味で「専門家」としてゼミに参加することが求められます。「教師が学生に一律に同じ内容を教える」という形式から離れ、それぞれの「専門家」の作業を互いに敬意をもって批判しあう、ゼミ形式の授業の肝をうまく捕まえて、楽しんで受講してください。
	個人HP
	Mail
	研究室



小藪 明生
こやぶ あきお

埼玉県所沢市出身。趣味は最近は旅行です。甘党。

専門分野

数理社会学 社会調査・データ分析 社会関係資本論

担当科目

ネットワークの社会学／ソーシャル・キャピタル論／調査データ 収集・分析の手法／ケーススタディの方法／必修基礎演習／選択基礎演習（社会データ分析・入門）

研究紹介

社会学、なかでも社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）論を中心テーマとしています。ここでは、友人関係、人脈、地域参加、市民社会などにおいて、社会に豊かな関係性があるとさまざまな良い影響があるとされています。ただし、具体的にはどのような関係性があればいいのか？どんな利点・欠点があるのか？どのように作ればいいのか？など課題は山積みです。学生の皆さんと一緒に考えていければ、と思います。

現代人間論系への誘い

社会に影響されて人間は形成され、人間が集まって社会となります。社会データを分析する際も、人が何を考え行動しているのか・何に影響されているのかに対する深い洞察なくして研究はできません。同時に、現実の諸現象に対して「なぜこんなことが起きるのか？」と疑問を投げかけることが、研究の原動力となります。人間についての知識を広げ、疑問を研ぎ澄まし、それを解きほぐすテクニックを磨いていきましょう。

ゼミ・演習紹介

必修基礎演習・選択基礎演習では、「論文」というものについて、考え方・調べ方・構成の仕方などについて初歩から実践的に慣れていくことを目指します。論理的な文章を書いたり、そのためにパソコン（携帯やタブレットではなく）の扱いに習熟することは、この先の人生で避けて通れない課題です。大学生活を生産的に、ラクをするためにも、早いうちに身につけてしまいましょう。

個人HP

Mail

koyabuakio@aoni.waseda.jp
（＊を半角@に変えて入力してください）

研究室

33号館1304



畑山 要介
はたやま ようすけ

石川県金沢市出身。地
ビールが好きです。

専門分野

社会学（経済社会学、現代社会論、消費社会論、フェアトレード論）

研究紹介

「個人の自由な行為がいかにして公共的な社会を作り出すのか」をテーマに研究しています。
たとえば、環境配慮や倫理的消費、企業のCSR、そして社会的企業などのように、自己の関心の追求を通じて公共的な社会が形成・維持されるようなあり方が今日では顕著に見られます。それは、諸個人の自由な行為が相互に関連し合うことによって、行為の意図には還元されえない公共的秩序が形成されていくようなあり方だと言えるのではないのでしょうか？ そうだとすれば、こうした新たな社会編成をいかにして理解することができるのでしょうか？ また、こうした社会編成の孕む問題はどこにあるのでしょうか？

なんだか疑問文だらけになってしまいましたけれど、大学で学ぶと言うことは結局、自身で問いを見つけそれを自身の力で展開していくことにほかならないのだと思います。短い大学生活、みなさんも自分自身の問いを切り開いていってください。

現代人間論系室からひとこと

高校までは勉強は試験のためのものだったと思いますが、大学では学問のために学問ができるところです。いっぱい本を読んでください。論系室に来て頂ければお勧めの本を紹介します。カンファレンス室（702号室）には色々な書籍が配架されてますので、是非お立ち寄りください。

個人HP

<https://sites.google.com/site/hatayamalab/>

Mail

hatayama*aoni.waseda.jp

（*を半角@に変えて入力してください）

研究室

現代人間論系室（33号館701号室）



酒井 貴広
さかい たかひろ

専門分野

文化人類学、民俗学

研究紹介

私は、民俗学や文化人類学で言うところの「憑きもの筋」を研究対象としています。憑きもの筋は、特定の人物や家が周囲の人々から一方的に「動物霊を使役して何かをしている」と決め付けられて生まれるもので、戦後期には結婚の妨げになるなどの社会問題にもなっていました。現在では表面化することの少なくなった憑きもの筋ですが、地域によっては、時には昔のまま、時には形を変えて憑きもの筋の語りが残っている場合もあり、こうした変化の様相と、変化を引き起こした要因を明らかにすることが今後の研究の課題です。また、この研究を通して、人間が社会やコミュニティに属して生きていく上で、どういったことが起こるのか、その際何が必要とされるかといった、さらに広い問題も見えてくるのではないかと期待しています。

現代人間論系室からひとこと

学生の皆さん、はじめまして。大学生としての生活は、勉強も生活も新しいことばかりで戸惑う場合も多いのではないかと思います。そんな折には、ぜひお気軽に論系室を訪ねて来て下さい。皆さんと一緒に、どうすればいいのかを考えていきたいと思います。皆さんとお会いできることを、楽しみにしています。

個人HP

Mail

tsakai*aoni.waseda.jp
(*を半角@に変えて入力してください)

研究室

33号館701号室（現代人間論系室）

2015 年度開講授業

※2016 年度には変更が生じることがあります。

■講義（一部）

現代人間論系総合講座 1（現代人の精神構造）

担当教員：大藪 泰／石田 光規／草野 慶子／村松 聡

学期：春学期 曜日時限：火 2 時限 配当年次：1 年以上

人が生きるということは、個としての生命を生き、関係としての生活を生きることである。人は身体をもつ個として誕生し、心もまたその身体に宿る。しかし、人の心は身体を離脱し、そこから自己と他者とを同時に見ることを可能にさせた。この視点の獲得により、人の心は、他者だけではなく自己とも語りあう世界を生きる心に変貌した。人は話しかけるときの、話しかけられるときも、心のなかで自己の声を聞き、他者の声を聞いている。そして、その自己の声には多くの他者がひそみ、他者の声には自己の声が反映されている。こうした人の心の働きは、おそらく人に特有な精神機能であり、それは人の生き方と結びついている。人が生きるものの中心課題は、自己の実現と他者との関係をいかに統合してゆくかにある。

この講座では、現代に生きる人の精神の働きやその仕組みを、こうした人に特有な個と関係の世界としてとらえ、文学、哲学・倫理学、心理学、社会学の視点から検討する。

＜各担当教員の講義内容＞

- ◆草野慶子 母性・家族・セクシャリティー—現代の母性を語る虚構と現実
- ◆村松 聡 関係から成立する人間の理解をもとめて—哲学的・倫理的視点から
- ◆大藪 泰 親と子の個と関係の世界—心理学的視点から
- ◆石田光規 現代社会の人間関係—社会的視点から

現代人間論系総合講座 2（生命の尊厳と生活の質）

担当教員：村松 聡／安藤 文人／岡部 耕典／小塩 真司

学期：秋学期 曜日時限：木 2 時限 配当年次：1 年以上

この講座は、現代の人間理解に欠くことのできないナラティブ理解を、文学、社会福祉と障害学、心理学、哲学などの種々の視点からとりあげ解説する。

現代人間論系の人間へのアプローチの仕方の紹介ともなるだろう。

各教員の担当する 3 回分の講義の概要は以下の通り。

安藤：ナラティブという認識の枠組みについて基本的な解説を行ったうえで、私たちの「生」に対する意識がナラティブによって構成されていく有り様をさまざまな実例を通して示す。

岡部：『福祉社会』のドミナントストーリーに対抗する障害者、路上生活者、セクシュアルマイノリティ等のナラティブを焦点化し、多様な生が毀損されないオルタナティブな社会の在り方に思いをめぐらす。

小塩：3 回の授業を通して、ナラティブに関連する心理学的機能について学ぶ。

村松：ナラティブがどのように哲学的にパーソン理解へと組み込まれているかを概観し、人間理解の応用例として NBIM について学ぶ。

キリスト教と祝祭 — キリスト教の教会暦を学ぶ

担当教員：田島 照久

学期：春学期 曜日時限：木 3 時限 配当年次：1 年以上

代表的な宗教であるキリスト教、仏教の中にあられた宗教思想を扱う。

キリスト教では、19 世紀デンマークの思想家セーレン・キルケゴールの「弁証法的抒情詩」という副題の付いた『畏れとおののき』に見られる信仰の逆説についてと、キルケゴール『死に至る病』における絶望の意味についてを扱う。さらに西田の『場所的論理と宗教的世界観』、最後に中国宋代、臨済宗楊岐派の梁山廓庵の『十牛図』を採り上げる。『十牛図』は失った牛を探し求めるという筋書きを用い、禅修行の十の段階が説かれている。

宗教思想 — 宗教哲学の世界

担当教員：田島 照久

学期：秋学期 曜日時限：木 3 時限 配当年次：1 年以上

代表的な宗教であるキリスト教、仏教の中にあられた宗教思想を扱う。

キリスト教では、19 世紀デンマークの思想家セーレン・キルケゴールの「弁証法的抒情詩」という副題の付いた『畏れとおののき』に見られる信仰の逆説についてと、キルケゴール『死に至る病』における絶望の意味についてを扱う。さらに西田の『場所的論理と宗教的世界観』、最後に中国宋代、臨済宗楊岐派の梁山廓庵の『十牛図』を採り上げる。『十牛図』は失った牛を探し求めるという筋書きを用い、禅修行の十の段階が説かれている。

ナラティブの理論

担当教員：安藤 文人

学期：春学期 曜日時限：木 3 時限 配当年次：1 年以上

「ナラティブ＝物語（り）」に対する学問的関心（ナラティブ・スタディーズ）は、この数十年の間に爆発的にも呼べるほど急激な広がりを見せつつある。それはほぼ人文科学と社会科学の全領域を覆うのみならず、医学における NBIM（Narrative-based Medicine：語りに基づく医療）のように、従来自然科学と見なされていた分野にまで越え広がり、Narrative Turn（物語的転回）という言葉さえ用いられるに至っている。大雑把な言い方になってしまうが、それまで細分化され、区々たる専門領域に囲い込まれていた「世界」が、「ナラティブ」というパースペクティブを得たことによって、互いに分かり合えるような共通の言葉で語られるようになったのである。

本講義では、「ナラティブ」について基礎的な理解を得るために、過去の言語論・テキスト批評理論を概観しつつナラティブの生成あるいは構築について論じ、また受容・解釈理論の大きな流れの中で、ナラティブの受容あるいは作用について考えていく。授業では、このナラティブ・スタディーズの広がりを実感してもらうためにも、小説など狭義の物語＝ナラティブだけではなく、津波体験を語る小学生の作文、肉親を自死によって失った遺児の手記、あるいは人生相談など個人の体験を通じて生み出されたナラティブから、ある時代や社会の中に立ち現れる大きな物語（マスターナラティブ）まで、できるだけ多様な事例をとりあげ、分析・検討していく予定である。

ユートピアと性

担当教員：草野 慶子

学期：春学期 曜日時限：月 3 時限 配当年次：1 年以上

ユートピア、すなわち万人にとっての理想郷、理想社会などどこにもないと、人間は知ってはいるけれども、明

日は今日より良きものだと思わない限り生きていくのは困難だとすれば、個人の生を包む社会の未来の完成形、ユートピアの具体像を構築することは人類にとって必然の課題だし、歴史を振り返っても、事実、われわれはそうしてきた。

その作業に際して、性愛にまつわる問題をどう解決するかは、富や階級や戦争に関する諸問題と並んで、決定的なものだ。有史以来、人間が愛だの恋だの色だのの問題でどれだけ悩み苦しんできたかを考えれば、最重要ポイントとさえ言えるかもしれない問題だ。

本講義では、近現代を中心にいくつかのユートピア像を紹介し、そこで性愛がどう扱われているかを検討し、考察していく。そのなかで、われわれが日頃当然のものと受けとめている、恋愛や結婚や家族のあり方について、受講者が再考する機会を得てくれれば、担当者としてこれ以上の幸せはない。

担当者の専門がロシア文学であるため、近現代のロシア文学や芸術、思想が題材としてとりあげられることがどうしても多くはなるが、ロシア語やロシア文化に関する知識は必要としない。

受講する学生の皆さんにむしろお願いしたいのは、遠い国や遠い時代の出来事や思いを、いまここにある自分の問題とリンクさせようとする用意をもつことである。そうした想像力なくして、深く強い学問的思考は不可能だと、私は信じています。

社会倫理学 ― 「ともに生きる」ための原理

担当教員：御子柴 善之

学期：秋学期 曜日時限：月 1 時限 配当年次：1 年以上

社会倫理学という学問分野は、いくつかの歴史的経緯の中では既存のものです。しかし、この講義では、「個人倫理」と対比されるものとして「社会倫理」を捉えることで、新たな社会倫理学を構想します。私たちの住む世界には、各人が「どうしてもよくない」と思う問題が山積していますが、その中にはその解決が個人のちからでは「どうしようもない」と思われるものも多く含まれます。たとえば、地球環境問題対策や高齢社会における介護です。そうした問題も、ともに生きる人々がそれを社会や社会制度の問題として明確に捉え、社会を改善する方向を見定めることで、解決できるかもしれません。したがって、この講義で構想する社会倫理学は「社会はどうあるべきなのか」という問いを立て、それに答えることを課題として引き受けるものです。

応用倫理学

担当教員：村松 聡

学期：春学期 曜日時限：月 5 時限 配当年次：1 年以上

倫理学は現実に生きる人々の迷いを出発点とし、常に現実の課題との接点の中で鍛え上げられてきました。この講義では、そういった現実の課題を、工学倫理、職能者倫理、そして環境倫理や動物の倫理などから取り上げます。その際、現実の課題は、複合的な問題であって、異なったレベルの問題意識と、理解、洞察を必要としていることを示し、そこから、私たちが倫理的問題を考える際のさまざまな判断基準と基本的な知識を説明します。

生命倫理

担当教員：村松 聡

学期：秋学期 曜日時限：金 3 時限 配当年次：1 年以上

生命倫理は、急速な生命科学の発展、とりわけ、遺伝子の解明、再生医療の進展によって、20 世紀後半から大きなテーマとなってきた分野である。この講義では、安楽死問題、妊娠中絶、遺伝子治療とエンハンスメントなど生命倫理の諸問題を取り上げ解説する。

コミュニケーション論 ― 個人化する社会における人間関係

担当教員：石田 光規

学期：春学期 曜日時限：木 4 時限 配当年次：1 年以上

現在の社会はとりわけ「個人」を重視する。「個人」を重視する傾向は、円滑な人間関係と時に鋭く対立する。この講義では、人びとの人間関係およびコミュニケーションがどのように変わりつつあるのか、具体的事例を用いながら解説してゆく。そのさい、学術的な理論を基礎に、現在公開されている統計データおよび映像から日本社会の人間関係の実情を学んでゆく。

日常生活の社会学

担当教員：大久保 孝治

学期：春学期 曜日時限：木 5 時限 配当年次：1 年以上

日常生活の中のあれこれの現象を素材として取り上げて、それを社会的に考察する。そのことを通して、社会学とはどのような学問なのか、社会的にものを見る、考えるとはどのようなことなのかをわかりやすく説明したいと考えている。

社会学に限らず、どのような学問にも、その学問に固有の言葉（専門用語）というものがある。ある学問を学ぶとは、その学問に固有の言葉を学ぶことだといってもいい。社会学を学ぶということは、社会学に固有の言葉（社会学用語）を学ぶことである。そうやって習得した言葉を使って、あなたは社会学のレポートや試験の答案を書くことになるだろう。しかし、おそらくそれだけではなくて、社会学の言葉を学んだ人は、自分の周囲の世界を社会学の言葉を通して眺め、語り、ときには変えようと試みるようになるだろう。言葉にはそうした力があるのだ。

社会学の専門用語を網羅した辞典がある。ハンディなものから片手では持ち上げられないものまで、大小の社会学辞典（事典）が出ている。しかし、だからといって、社会学辞典を最初のページから読んでいくという勉強法は（まさか実践しようとする人はいないとは思うが）賢明ではない。辞典というものは、通常、アイウエオ順ないしアルファベット順で言葉を配列している。隣接する言葉同士は、見かけが近似していても、必ずしも意味は近似してはいない。意味がバラバラの言葉を頭の中に順次インプットしていても、言葉のシステムは構築できない。ある言葉の意味というのは、それと近似した言葉や対立する言葉との関連において、はじめてはつきりとするものである。具体的には、あるキーワードを設定して、それを中心に据えて、類似語や反対語とリンクさせながら、言葉のシステムを作っていくのがよい勉強法だろう。というわけで、まず最初に「社会」という言葉を取り上げて、社会的思考のシステムの構築の第一歩を踏み出そうと思う。

現代人のライフスタイル

担当教員：大久保 孝治

学期：春学期 曜日時限：火 3 時限 配当年次：2 年以上

個人のライフスタイルは、基本的には家庭生活、学校・職業生活、そして余暇生活の組み合わせとして把握することができるが、近年、それぞれの生活領域が不安定なものになっている。すなわち、未婚率の上昇と非正規雇用の増加である。戦後のある時期まで、ほとんどの人は結婚して家庭をもち、多くの人は正規雇用（社員）として働くか、自営業として働いていた（あるいは正規雇用や自営業の人を配偶者にもっていた）。家庭と職場という

のは強い重力をもった集団であり、その強い重量は個人の自由を拘束するかわりに、個人の生活＝人生に安定をもたらしていた。しかし、いま、家庭と職場はかつてのような重力を失い、人々は自由だけれども不安定な生活＝人生を送るようになってきている。今後、さらなる個人化（所属集団からの離脱や排除）が進む中で、われわれのライフスタイルはどのようなものになっていくだろうか。そうしたことを考えていく。

ライフストーリーの社会学

担当教員：大久保 孝治

学期：秋学期 曜日時限：木 5 時限 配当年次：1 年以上

「人生をいかに生きるか」にかかわる規範のシステムを「人生の物語」（ライフストーリー）とここでは呼ぶ。どのような社会も「人生の物語」をもっている。日常生活を構成する諸々の活動が「人生」として組織化されることは、個人のためというより、社会の秩序と発展にとって必要なことだからである。したがって「人生の物語」はその社会の構造的性質と適合するものでなくてはならない。たとえば、江戸時代の日本では、身分相応に生きること（生まれた階層の内部で一人前になること）が「人生の物語」のメインテーマであったが、明治以降の日本では、立身出世（出身階層よりも上の階層へ移動すること）が「人生の物語」のメインテーマとなった。

では、現代のわれわれの社会における「人生の物語」とはどのようなものだろうか。「人生の物語」は人々の意識の中に存在するが、決して意識の中のみ存在するのではない。それは制度として、すなわちデュルケイムの言うところの社会的事実として、個人の外部に一定の強制力をもって存在している。ポピュラーカルチャーは「人生の物語」の陳列棚である。そこにはさまざまな「人生の物語」が並んでいて、われわれは小説を読んだり、映画や TV ドラマを観たり、J ポップを聴いたり歌ったり、商品広告に接したり、他人のブログを読んだり自分でブログを書いたり・・・そうした行為を通して「人生の物語」を知らず知らずに、ときには意識的に、吸収している。

授業では、個人の成長に伴うライフストーリーの変容と、近代日本におけるライフストーリーの型の生成過程を歴史的にたどりながら（日露戦争後から現代までのおおよそ 100 年間）、現代において「人生の物語」はどのように機能し、あるいは機能不全を起こしているのか、そしてこれからどのように変容しようとしているのかを考える。

子どもの発達心理学

担当教員：大藪 泰

学期：春学期 曜日時限：火 4 時限 配当年次：1 年以上

人間の心身の働きは、受精から死にいたるまでさまざまな変化を見せる。乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期には、その段階に特有な心身の働きがある。発達心理学は、そうした発達のな変化の中にひそむ一般法則や個人差を見出そうとする心理学の一領域である。人の乳児は、数百万年にわたる進化の過程で獲得された生得的な能力を備えて誕生する。そして、先人が蓄積してきた文化の影響を受けながら、他の動物とは大きく異なる発達過程を歩みだす。子どもの心は、自己と他者の心に出会い、過去を振り返り、未来を想像しながら、自分の生き方にふさわしい意味世界を見出して生きようとする。そこには、他の動物とは異なる人の心に特有な発達過程があると考えられている。

私たちに確実に子ども時代があり、子どもの世界を経験してきたはずである。しかし、その子ども時代の体験は、どこか遠いかなたにあるように感じられないだろうか。子どもとは一体何なのだろうか。何を感じ、何を考え、何を見ているのだろうか。もう一度この忘却された子ども時代の心を考えることは、今の自分を見つめなおし、将来の自分を考える糧になるであろう。

この講義では、胎児期から児童期までの人の心の発達を、認知、情動、さらに社会的認知の視点から論じる。

人間の発達と文化

担当教員：大藪 泰

学期：秋学期 曜日時限：火 5 時限 配当年次：2 年以上

ヒトの「ココロ」は、文化を学習することによって、人の「心」となる。文化とは、人が何世代にもわたって構築してきた集合知としての意味世界である。人間は、文化という意味世界を生きようとする心をもった動物である。この講義では、3 つの視点から、人間の心の発達と文化との関係を論じてみたい。

第 1 の視点では、人間の文化とはなにか、について、霊長類の文化と比較しながら論じてみたい。チンパンジーが保有する「文化」との比較は、人間の文化の本質的な特徴を照らし出すであろう。第 2 の視点では、文化という目には見えない意味世界に、人間の乳児はなぜ気づけ、なぜ学習できるのか検討したい。この文化学習を可能にさせる人間の子どもの能力の不思議さに気づいてほしい。第 3 の視点では、異なる文化を比較する視点から、人間の行動や発達に見られる文化間の違いについて取り上げてみたい。近年の文化心理学の発展にともない、日本文化と西欧文化との間にはさまざまな差異が指摘されてきた。そこには一体どんな違いがあるのだろうか。そして、その違いが人間の発達や行動にどんな影響を及ぼしているのだろうか。

私たちは身の回りにある文化を当たり前の世界、いわば空気のようなものとして生活している。しかし、それは決して空気のように当たり前のものではない。文化とは何なのだろうか、文化を学習する心にはどんな特徴があるのだろうか、そして文化の違いによって人間の発達や行動にどんな違いが生じるのだろうか。こうした問題について講義する。

個性の発達と差異 ― 人間の個人差をどのように捉えるか

担当教員：小塩 真司

学期：春学期 曜日時限：火 2 時限 配当年次：1 年以上

人々は互いに異なる存在であり、それぞれに個性がある。しかしその「個性」をどのように捉えるのかを考える機会には多くはない。この授業では、個性の捉え方に関して、(1) 個人差の捉え方についての考え方、(2) 個人差の測定方法、(3) 個人差把握の歴史、(4) 個人差把握の先入観と実際、について講義を行う。心理学特に個人差を扱うパーソナリティ心理学に立脚しつつ、歴史や社会状況もふまえて論じる。

情報社会論

担当教員：石田 光規

学期：秋学期 曜日時限：火 3 時限 配当年次：1 年以上

インターネットの登場により劇的に変化を遂げた、私たちの情報環境はコミュニケーションをはじめとする生活のあり方を大きく変えた。本講義は、情報通信ツールを使ったコミュニケーションを中心に、情報社会について読み解いてゆく。

児童家庭福祉論 ― 子どもの権利と児童家庭福祉の基礎知識

担当教員：増山 均

学期：春学期 曜日時限：金 1 時限 配当年次：1 年以上

家庭のゆらぎ、貧困の問題、地域社会の相互扶助力の低下の中で、いま子育てにおいて「福祉」の力を必要とする子どもが増えている。半世紀以上前に定められた「児童憲章」には、児童は人として尊ばれ、社会の一員として重んぜられ、良い環境の中で育てられるとされていたが、その課題は今なお実現していない。児童虐待に対応するために、新たに「児童虐待防止法」が作られるとともに、「家庭の子育て支援」「地域の子育て支援」などを通じて子どもの人権を守るとりくみが進んでいる。この講義では、児童家庭福祉をめぐる今日の新しい動向に注目しながら、①児童（子ども）の生活と権利、②親の労働と子育てをめぐる諸問題、③児童福祉の法制と児童福祉行政のしくみ、④児童福祉の施設と実践、⑤児童福祉に関わる職員の仕事、児童福祉の歴史と現状など、児童福祉の基礎知識について学ぶ。「子どもの権利条約」を手がかりにして、児童家庭福祉をめぐる国際的な動向などについても学んでゆく。

福祉社会論 ― 「新たな福祉のかたち」を求めて

担当教員：岡部 耕典

学期：秋学期 曜日時限：月 4 時限 配当年次：1 年以上

市場経済至上主義・新自由主義の進展と医療や社会保障の財政危機が喧伝されるなかで、格差や貧困の拡大と生活保護や介護などのセーフティネットのほころびが顕在化している。

本講義では、まず閉塞する福祉国家の現在を確認する。医療・福祉・労働の領域における現代社会の課題を整理し、それをケアや政策を読み解く理論や思想への架橋を試みる。そのうえで、「当事者」概念を手掛かりとしつつ、「援助の対象者」としてまなざされる人々の生と主体性の視座からケアの政策と実践をとらえ直していく。

このような営みを通じて最終的にめざされるのは、社会の多様な構成員にとって望ましい社会／世界の在り方とバルネラブルでプレカリアスな生に寄り添う「新たな福祉のかたち」の構想である。

福祉社会の臨界を読み解くための手がかりとなるゲストスピーカーを招く予定である。また、ケアの政策と実践にかんする時事問題も積極的に取り上げていきたい。

- ・「福祉国家」の閉塞／「健康と医療」の政策と理論
- ・ソーシャルワークの理論と歴史／臨床の場とケア
- ・社会問題と社会政策／労働と所得保障／福祉社会のアポリア
- ・「当事者主体」のブレークスルー／プランニング／ケア
- ・必要の社会的構築／分配する最小国家

ネットワークの社会学

担当教員：小藪 明生

学期：春学期 曜日時限：木 6 時限 配当年次：1 年以上

この授業では「社会的ネットワーク」という考え方をを用いた社会分析について解説する。「ネットワーク」という概念は、自然科学から社会科学に至る幅広い学問分野で、関係性や構造を含む多様な現象を解明する新しい視点として、理論的・方法的に急速に普及しつつある。ネットワークという発想を用いた社会科学的な分析は、家族、コミュニティ、ビジネスにおける人間関係などさまざまな領域に応用されている。またこのような研究成果は、従来の社会学的な基本概念を新たな視点から捉え直すことにもつながる。この授業においては、これらの重要な先行研究を紹介しつつ、ネットワーク理論の基本的な考え方、概念、分析用具、指標について学ぶ。そしてこれらの理論的・方法論的特徴を理解することを通して、観察対象となる社会集団を取り巻く社会的環境や現代社会の特徴をネットワーク論的に読み解く力を修得することを目標とする。

ソーシャル・キャピタル論

担当教員：小藪 明生

学期：秋学期 曜日時限：木 6 時限 配当年次：1 年以上

この授業では近年注目を浴びている「ソーシャル・キャピタル (Social Capital)」の概念とそれを用いた分析の実践について論じる。この議論は幅広い領域に応用されているが、人びとの自発的社会参加、中間集団の豊かさ、信頼など取り上げている点で共通している。ソーシャル・キャピタル論の特徴としてまず、分析対象となる集団や地域内における社会関係と価値・規範意識を一種の資本とみなして測定し、文化横断的・通時的比較分析を行うための一種の指標であり、「分析手法」であることが挙げられる。また、さまざまな目標変数（経済発展、治安、健康など）の向上に効果を持つことから、それ自体の育成が「政策目標」とされる。さらにソーシャル・キャピタルがどのように形成されるのか、どのように目的変数の向上がなされるのかについてのメカニズムを、社会諸科学の過去の知見と整合的・体系的に説明する必要があるという点で、「社会理論」となっている。本授業では、このような理論、実証、実践という三つの視点からソーシャル・キャピタル論を体系的に学ぶ。

■専門演習（一部）

現代人間論系演習（宗教と共同体） ― 聖なるものをめぐる人間の文化的いとなみを探る

担当教員：田島 照久

学期：春学期 曜日時限：月 3 時限 配当年次：2 年以上

人間は調和のある安全な世界（コスモス）に住みたい、という強い「コスモス願望」(M. エリアード)を持っている。そのために祭を祝い、年齢ごとの、あるいは出来事に応じた多くの通過儀礼を行ってきた。さまざまな共同体における儀礼、習俗、祝祭、祭礼は「聖なるもの」へ向けて限りある人間がなす語りかけであるといえよう。視覚芸術や音楽芸術、さらに競技スポーツさえもそうした「聖なるもの」へのかかわりから出発した。

日本人のメンタリティーには「聖なるもの」(R. オットー) に対する畏敬の念とともに、「自然」と同一視されるような非人格的な「聖性」に対する強い憧れが窺われる。

「細部にこそ神が宿る」という民俗学的美意識は繊細な日本文化を創り上げてきた。演習では芸術活動も含めたこうした「聖なるもの」をめぐる人間の文化的いとなみを自由な視点からグループで採り発表を行ってもらおう。

初めにどんなテーマが考えられるのかいくつかのテーマ例を紹介する。そのあとグループに分かれてテーマを決め作業を分担する。そのあと順番にグループ発表を行う。学期末には担当した分担項目についてレポートを各自提出してもらおう。

現代人間論系演習（心と物語） ― 感情を表す言葉、感情を作る言葉

担当教員：安藤 文人

学期：春学期 曜日時限：木 2 時限 配当年次：2 年以上

人間は身振りや表情だけではなく、言語で感情を表現する。したがって、私達の感情の有り様を、表出された言語の姿から探ることもできるだろう。たとえば、「思いが胸に溢れる」、「様々な感情が渦巻く」、「心がからからに

涸れてしまう」という表現からは、私達が感情を何か水のようなものとしてイメージしていることが分かる。逆からも考えてみよう。言語は単なる感情表現の道具だろうか。逆に、私達はある感情を表現する言語を知ることによって、そのような感情の存在を認識することはないだろうか。「うざい」という（比較的新しい）言葉は、新たな感情の発見と共有をもたらしたのではないだろうか。「忸怩たる思い」という言葉を知る前に、「忸怩たる思い」は感知されていただろうか…。

このような問題意識から出発して、本演習では、日常の会話やツイッターから文学作品、あるいはメディアの言語表現まで取り上げ、私達の生活における感情と言語の関わり合いを多面的に検討する。

現代人間論系演習（ナラティブ分析の実際） — 物語を生きる

担当教員：安藤 文人

学期：秋学期 曜日時限：木3時限 配当年次：3年以上

この演習では、春期講義「ナラティブの理論」を踏まえて、受講者が自ら関心あるナラティブを選び、その分析を実際に試みることを通じて、ナラティブがどのように私たちの「生」に対する認識を構成し、またどのような行動の枠組みとなって働いているのか、そのプロセスを検討する。最初にナラティブ・アプローチの基本的な概念や用語を学び、その後いくつかのナラティブ（山口百恵の自伝的エッセイ、人生相談、トラウマ体験を語る手記、新聞記事など）を取りあげて実際の分析を行う。そのうえで、グループもしくは個人が任意のナラティブについて分析を試み、全体に発表する。※なお、過去において演習「人物と言説」を履修した場合は、この科目を受講できない。また、受講者は以前に春期科目「ナラティブの理論」を履修していることが望ましい。

現代人間論系演習（「わたし」を読む） — 日本近現代小説から見る「わたし」の構築

担当教員：安藤 文人

学期：秋学期 曜日時限：火2時限 配当年次：3年以上

この演習では、「わたし」というものがすでに確定したものとして「発見される」のではなく、他者との、あるいは社会との関係性を通じて「構築される」のだとする見方に基づきながら、明治以降現代までの日本人が、それぞれの時代的・社会的状況の中でどのような自己認識・自画像を獲得してきたか、という問題を、近現代日本小説を取り上げて検討する。前半では担任教員が選んだ幾編かを対象としてナラティブ分析を試み、後半では個人もしくはグループによる研究発表を行う。

現代人間論系演習（不死の様式） — 健康と美容を考える

担当教員：草野 慶子

学期：春学期 曜日時限：火4時限 配当年次：2年以上

いくら再生医療についてあれこれ話題になっているのを聞いても、それにしても「不死」……と言われてもピンとこない。

そういう方も多いと思いますが、先端科学の動向とはまたべつに、私たちの日常の多くのふるまいも、じつは不死への願いを表現している、とも考えられます。たとえば、

どうして病気になったら病院に行くのか？ 健康を保つことは、不死への願いの直接的表現です。

どうして友だちや恋人がほしいのか？ 自分の存在を多くの人びとにかけがえのないものとして記憶してほしい、私がここにあるときは私を愛し、私がここから去ったら惜しみ、変わらずに慈しんでほしい。その願いは、永遠へと通じています。

どうして愛する人とのあいだに子どもがほしいのか？ もうわかりますね。自らの死を、子どもの誕生によって贖おうとするからです。さらに、

どうして他者を幸せにしたいと思うのか？ そうすることによって私たちちっぽけな個の存在は時間的空間的広がりを得て、個々の命の限界を超えて存在可能になるのです。

今年度のこの演習では、健康志向、そして美容とアンチエイジングの問題を扱います。

いつまでも健康で、そして若く美しくありたい、という願いは、死への恐怖を背景にしていますし、

度を過ぎた瘦身願望は若さや美しさへの希求を反転させ、死の願望をそこに隠しているようにも思えます。

もちろん、ジェンダーをめぐる諸問題も、そこには浮かび上がってくるでしょう。

現代人間論系演習（生の詩学／生の解釈） — 「家族」と「性」をめぐる、現代日本の女性作家の作品を読む

担当教員：草野 慶子

学期：秋学期 曜日時限：火1時限 配当年次：2年以上

「家族」そして「性」。このふたつの、緊密に関連する主題にかかわる、現代日本の女性作家の作品を読みます。「お父さんが外で働いて、お母さんが家事と育児をする。子どもが幾人かいる」「長じた子どもは、やがてただひとりの異性を選び、結婚して、生殖して、そして父母に倣った家族を再びつくる」といった家族観、性愛観からもっとも遠いところにあるのが、もしかしたら、現代の女性作家たちの作品かもしれない、と考えたのが、その動機です。

松浦理英子、水村美苗、小川洋子、村田沙耶香……などの作品を読んでいる方、関心のある方はご参加ください。

といっても、読書は基本的にはひとりでするもので、大学の演習という場でなにをするかと言えば、それはもう、すでに読んできた作品について報告していただく、ということになるかと思います。

担当者（草野）自身は、上に名前を挙げた作家たちの作品を読んでいます、ほかにも読むべき作品がたくさんあることはもちろん知っています。

受講者の皆さんには、それぞれの関心、読書体験から、自由に作品をご紹介いただくことになります。（ただし、現代日本の女性作家の作品から）

演習という場を通して、お互いの関心領域が広がり、多層化し、豊かに展開することを目指したいと思います。

現代人間論系演習（近代的人間観の論理と倫理） — 人文学と利益追求

担当教員：御子柴 善之

学期：春学期 曜日時限：月5時限 配当年次：2年以上

「近代」に対する哲学的態度は様々ではありません。そこに「啓蒙の自己崩壊」を見る哲学者もいれば、それを「未完のプロジェクト」として論じる哲学者もいます。さらには、ポスト・モダンというよく聞かれる言葉づかいもあります。この演習では、現代の哲学者、マーサ・C・ヌスバウムの著作『経済成長がすべてか？』を取り上げ、それを検討することを介して、近代的人間観を再検討します。しばしば近代の側面の一つとして世界資本主義が挙げられるからです。この著作一冊を丁寧に読みぬくことは、それを成し遂げた読者に充実感と自信を与えることでしょう。

現代人間論系演習（環境問題の論理と倫理） — 環境倫理学の現在

担当教員：御子柴 善之

学期：秋学期 曜日時限：月 4 時限 配当年次：2 年以上

地球環境問題は時代のキーワードであり、環境問題対策は、一般に「総論賛成」という性格をもちます。しかし、いったん具体的な場面、さらに言えば、各人自身が環境問題対策として推奨されることを実行する段階となると、「各論反対」とも言える困難が姿を表します。そうした状況に対して向かい合い、言葉を紡ごうと努力するのが環境倫理学です。この分野ではさらに、人間と動植物との関係、現在世代と未来世代との関係、地球環境問題と南北経済格差との関係などがテーマとなります。これらも併せて学ぶことで、環境問題が哲学的な問題でもあることを知ることができるでしょう。

現代人間論系演習（社会福祉の論理と倫理） — 「ケア」概念を中心に

担当教員：御子柴 善之

学期：秋学期 曜日時限：月 6 時限 配当年次：2 年以上

マイケル・サンデルの名前と共に、「正義」がしばしば語られるようになった。このとき、まっとうな社会は正義が実現した社会である、という論点までで思考を停止するならば、私たちは重要な問題を見落とすことになる。それは、「正義」概念と一対をなす「ケア」概念が提起する問題領域である。正義が合理的な手続きによって構想されるのに対し、「ケア」は個人・家族・地域社会などのコンテキストとともに語られる。この演習では、このような「ケア」の領域を正面から目撃し、「ケア」という事態の豊かさを把握したい。

演習は、テキストとして浜渦辰二編著『＜ケアの人間学＞入門』を採用し、その各章ごとに分担して発表するのみならず、参加者自身が「問い」を立て、それを参加者全員で共有し、全員で考える、という形式で行う。

現代人間論系演習（現代的人間観の論理と倫理） — 哲学的人間学への誘い

担当教員：村松 聡

学期：春学期 曜日時限：金 5 時限 配当年次：2 年以上

現代人間論系の専門教育への導入として、「人間とは何か」を主題として、哲学的人間学を取り上げます。人間と動物は（ちがうとするならば）どこがちがうのか。人間のもつ特徴、本質的な点は何か。易しいテキストから考えていきます。

現代人間論系演習（道徳意識の研究）

担当教員：村松 聡

学期：春学期 曜日時限：月 4 時限 配当年次：2 年以上

私たちが「いい」あるいは「悪い」と考え、感じる、その基準はひとつではありません。倫理学でもっとも基本的な基準は三つ（義務倫理学・功利主義・徳倫理学）あります。授業では、具体的なケースを検討しながら、三つの基本的な倫理思想を学んでいきます。

マイケル・サンデル、『これからの正義の話をしよう』を使用し、テキストが提示する例を中心にグループで討議しながら、倫理的な思考を身につけます。

現代人間論系演習（生命・医療の論理と倫理） — 生命倫理への入門

担当教員：村松 聡

学期：秋学期 曜日時限：金 2 時限 配当年次：2 年以上

この演習は、現代人間論系で応用倫理学などを勉強していくための基礎として位置づけられます。生命倫理への入門として、様々なトピック、「安楽死と尊厳死問題」、「遺伝子操作」、「少ない医療資源の配分」等々について勉強します。

現代人間論系演習（実存と他者の倫理） — 実存としての自己理解と自己と他者の関係

担当教員：村松 聡

学期：秋学期 曜日時限：月 3 時限 配当年次：2 年以上

この演習では「人間とは何か」を実存理解から考えるとともに、自己にとって他者とはなにかを考えていきます。私たちは、単に生物学的ヒトではなく、人間としてそれ以上の存在です、それを「実存哲学」は、実存と呼んでいます。

この演習は、実存としての人間に固有な特徴を考察するとともに、そこに本質的に属している他者との関係、他者による承認、他者の影響を考えていきます。

現代人間論系演習（親密圏の論理と倫理）

担当教員：石田 光規

学期：春学期 曜日時限：月 2 時限 配当年次：2 年以上

「親密なつながり」というと多くの人が肯定的な印象を抱く。しかし、その一方で、「親密なつながり」に息苦しさを感じる時もある。社会学では親密圏に關するいくつかの議論がある。本演習はそれらをテキストに「親密なつながり」の実態を読み解いてゆく。なお、以下の計画は履修者の人数や授業の進行具合に応じて変更することもある。

現代人間論系演習（現代人と職業）

担当教員：石田 光規

学期：春学期 曜日時限：木 2 時限 配当年次：2 年以上

現代人は社会生活を送るにあたり、よほどの例外でない限り、なんらかの「仕事」をして「稼ぎ」＝貨幣を得ることを求められる。貨幣を得るための仕事を多くの人は職業と呼ぶ。そのように考えると、職業に就くことは私たちの生活と切っても切れない関係にあると言える。「職業を得て生活する」、その素朴な生活スタイルは私たちの人生に大きな影響を与える。本演習では、多くの人びとが職業生活を送るにあたって直面する諸事象について検討し、考察を深める。前半は授業担当者がライフストーリーをもとに話題を提供し、討論を通じて現代社会における職業生活の諸相を検討する。後半は履修者の報告をもとに議論を深めてゆく。

15 回の演習のなかではゲストスピーカーを交えた討論も予定している。なお、履修人数により予定を変更することもある。

現代人間論系演習（サイバー空間の論理と倫理）

担当教員：石田 光規

学期：秋学期 曜日時限：火 6 時限 配当年次：2 年以上

サイバー空間が整備されることにより、私たちは非対面での接触機会が格段に増えた。このような社会をいか

に過ぎず、ゆくべきか検討する。演習は文献の輪読と個人の発表により進めていく。なお、履修者の人数や授業の進行具合に併せて計画を変更することもある。

現代人間論系演習（個人化の社会学）

担当教員：大久保 孝治

学期：春学期 曜日時限：火2時限 配当年次：2年以上

個人化とは個人が集団から離脱していく、あるいは排除されていく過程であり、それは近代化の一側面である。個人化には2つの段階があり、第一の個人化は前近代的集団（血縁共同体、地縁共同体）からの個人の離脱・排除の過程であり、同時に、近代的集団（企業や家庭）への個人の参入・組み込まれる過程である。日本の場合、第一の個人化は明治維新とともに始まり、戦時中の反個人化（全体化）を間にはさみながら、高度成長期にピークを迎えた。第二の個人化は近代的集団からの個人の離脱・排除の過程であり、バブル経済の崩壊以後、急速に進行し、現在に至っているが、近代的集団から離脱し、あるいは排除された個人を受け入れる脱近代的集団（？）がどのようなものであるかは、まだはっきりしない。演習では、まず第一の個人化の過程を確認し、次に第二の個人化の行方について考察する。

現代人間論系演習（心をみる）

担当教員：大藪 泰

学期：春学期 曜日時限：火4時限 配当年次：2年以上

私たちは人の振る舞いを見て、その人の心を感じ取っている。人間の心は、人の振る舞いに出会ったとき、自動的にその人の「心を観る」仕組みを備えているからである。人の心を科学的に理解しようとする心理学は、こうした人の心の仕組みを利用して、人間の心理を客観的に理解する方法を生み出してきた。行動観察法という方法である。人間の行動を見て記録するのであるから、だれでも簡単にできる方法だと考えられやすい。しかし、行動を科学的に記録したり、行動の背後にある心の意味世界を推測可能にさせる観察データを得るにはそれなりの知識と訓練が必要である。

この演習では、行動観察法の基礎を学ぶ。行動観察法の理論に触れ、自分たちで実際の観察データをとること、発達障害児などの動画データを使ってそこに映し出された行動の意味を探ること、子どものアタッチメント行動の動画データから観察記録を取り、レポートを作成することなど、行動観察法の基礎を実践的に学んでみよう。

現代人間論系演習（発達の生得性と環境効果）

担当教員：大藪 泰

学期：秋学期 曜日時限：火4時限 配当年次：2年以上

人間の発達過程やその行動の個人差は、遺伝によるのだろうか、それとも環境からの影響が強いのだろうか。この氏が育ちかの論争は古くからあり、現在もおngoingしている。どちらを重視するかによって、生得説（遺伝論）と経験説（環境論）という対立する見解にわかれる。前者は、人の行動や能力は経験や学習ではなく、生得的に備わった素質が決定するという考え方であり、後者は、人の心は白紙のようなものから出発し、その発達は環境（経験や学習）によって決定されるという考えである。遺伝と環境の論争として、どのような発達現象が検討されているのだろうか。そして遺伝と環境がどのように影響していると考えられているのだろうか。

この演習では、人の行動や能力の発達に違いを生み出す原因を扱った論文を読み、発表し、考え、ディスカッションしながら、さまざまな視点から遺伝と環境の関係を考えてみよう。

現代人間論系演習（現代社会とセラピー文化）

担当教員：小塩 真司

学期：春学期 曜日時限：木6時限 配当年次：2年以上

科学的な研究知見に基づく技術が高度に発達した現代においても、なぜ人々のオカルトや占い、超能力などへの親和性は失われないのだろうか。現代社会で提供されるセラピー的な道具や儀式（占い・自己啓発本やセミナー・関連グッズ等々）は、「簡単に人間の考えを変える」「簡単に人生や運命を変える」ものとして扱われている。そのような道具や儀式を求めてしまう要因には、さまざまなものがあると考えられる。

その中でも本演習では、タイトルにある「現代社会とセラピー文化」の根源に存在すると考えられる、人間の認知的な志向性に焦点を当ててみたい。これまでに心理学では、人間の認識や思考の特徴を数多くの実験・調査から明らかにしてきた。本演習では、これまでに心理学で見出されてきた研究知見からこの問題について何が言えるのか、授業で議論しながら考察するものである。

現代人間論系演習（世代間交流の理論と実践）―世代を超えたつながりを通じて人間理解の幅をひろげる

担当教員：増山 均

学期：秋学期 曜日時限：火2時限 配当年次：2年以上

ライフコースにおいて、人はいつの時代も「保育期」「思春期」「更年期（思秋期）」「介護期」に困難をかかえる。ますます進む高齢化・長寿化のもとで、80年にわたるライフコースにおいて、今日の家族は「4つの困難期の重なり」という新しい困難に直面している。家族の孤立化、地域社会の無縁化が進む中で、子ども・青年・成人・高齢者、各世代の断絶は避けたい。そうした困難の中で、各世代の幸せの実現と家庭・地域文化の継承という課題の重要性が増しているが、それらの困難と課題にとりくむ世代間交流実践の意義を考える。中野区の「生涯学習大学」に学ぶ高齢者と交流し、共通するテーマをさだめて共に学びあう機会をつくる。

現代人間論系演習（子どもの福祉と子育て支援） ― 幸せ平等を実現する子育てにむけて

担当教員：増山 均

学期：秋学期 曜日時限：金1時限 配当年次：2年以上

「子どもの貧困」「児童虐待」「家庭内暴力」「ひきこもり」「不登校」「非行」「健全育成施策」「難病の子どもの教育文化」問題など、子どもの福祉の分野における諸問題を取りあげ、それらの問題の背景をさぐるとともに、社会的対応に関する基礎的知識を学習する。さらに、教育、少年司法、児童文化、メディアの諸分野における施策や子育て支援の多様な取り組みについても視野を広げていく。

現代人間論系演習（福祉社会の臨界）

担当教員：岡部 耕典

学期：秋学期 曜日時限：木4時限 配当年次：2年以上

社会の構成員がケアや再分配について十分な配慮をもっている社会が「福祉社会」である。権力的で中央集権的な「福祉国家」＝「大きな政府」から、私たちひとり一人の生が毀損されない「福祉社会」＝「分配する最少国家」への移行が求められている。しかし、グローバリズムと金融資本主義の進展は、能力主義・私的所有・自己責任論に裏打ちされた「小さな政府」へと私たちを追い立てている。

本演習ではこのような問題意識を踏まえ、福祉社会の臨界にせめぎあうさまざまな課題について以下の4つのテーマを設定し、講義や映像の視聴、ディスカッションとグループ報告を繰り返しながら多面的に検討する。

- ・いのちを分ける： 出生前診断／臓器移植／「尊厳」死
- ・老い／呆けること：認知症ケアと政策／毎日がアルツハイマー？
- ・〈貧困〉生活のリアル： 路上生活／生活保護パッシング／女性の貧困／貧困の連鎖
- ・抗するために： ヘイトスピーチ規制／LGBT 解放運動／オルタナティブな暮らし方

現代人間論系演習（調査データ 収集・分析の手法） — 社会調査およびデータ分析の基礎

担当教員：小藪 明生

学期：春学期 曜日時限：火5時限 配当年次：2年以上

社会調査およびそのデータ分析の方法論の基礎的な部分について理解する。量的な面では、単純集計、度数分布、代表値、クロス集計などの記述統計データの読み方や、それらの計算や作成の仕方について理解する。質的な面では、インタビューを実施し、そのデータの取り扱い・加工・レポートへのまとめ方などについて理解する。これらを実践的に取り扱うことを通して、社会学における量的調査と質的調査の特性を理解し、それぞれのデータの扱い方とレポートへのまとめ方などを習得する。

現代人間論系演習（ケーススタディの方法）

担当教員：小藪 明生

学期：秋学期 曜日時限：火4時限 配当年次：3年以上

ケース（事例）スタディ（研究）とは、文字通り具体的な事例を研究し、そこから何らかの学術的知見を得ようとするものである。しかしやみくもに・とにかく現地に行ってみてくれればよいというものではない。ケーススタディにもさまざまな領域がある。語られたり書かれたりした個人のライフストーリーのようなものから、人々の相互行為について、身近な流行現象、ある地域に古くから根付いた慣習や考え方や年中行事についてなど、さまざまな領域にまたがっている。さらに、「ケース・メソッド」と呼ばれる、学習者が判断や対処を求められる模擬ケースを教材とし、討論しながら意思決定や問題解決の実践力を磨くことを目的として開発された討論形式の授業（研修・講習）も広くは「ケーススタディ」に含まれる。

本演習ではさまざまな種類のケーススタディの実例や資料にあたり、学生同士議論を行い、そこに登場する人々のさまざまな視点について理解し、議論する中で、幅広い視点を獲得したいと思う。また社会科学的なケーススタディは、単なるジャーナリズムとは異なる分析的な視点を持つて行う必要がある。対象者の選定やデータの収集法についても基礎知識を理解する必要がある。

■ゼミ

※現在の1年生が3年生となる2017年度には、ゼミの構成に変更が生じることがあります。

精神文化論ゼミ（聖性文化論）（春期・秋期） A — 聖性をめぐる文化の諸相を探る

担当教員：田島 照久

学期：春秋学期 曜日時限：火3時限 配当年次：3年以上

人間は世界を調和ある「コスモス」として受け止め、そこに住み込もうとする。そしてコスモスの根源的聖性を介して自己理解を成立させる。聖性をめぐる文化的営為は、哲学的言説、芸術的表象、さらには民俗芸能といった広範な文化領域にわたっている。日本人のメンタリティーには事挙げせぬ無名の精神性ともいえるべき、聖性に対する鋭い感受性があるように思われる。こうした聖性に対する感受性は「細部にこそ神が宿る」という民俗的美意識と結びついて、繊細な日本文化を創り上げてきた。

ゼミでは、聖性をめぐる文化に関することであれば日本に限らず各自の関心にしたがってどんなテーマを扱ってもいいが、まずは基本知識を得るためにミルチャ・エリアーデの『聖なるものと俗なるもの』を講読する。つぎに各自の関心に応じてテーマを決め、それについて概説的なプレゼンテーションを行う。それを出席者による質疑、討論の材料とする。こうした準備ののちに夏合宿において各自のテーマに関したまとまった発表をしてもらう。

精神文化論ゼミ（聖性文化論）（春期・秋期） B — 聖性をめぐる文化の諸相を探る

学期：春秋学期 曜日時限：火4時限 配当年次：3年以上

人間は世界を調和ある「コスモス」として受け止め、そこに住み込もうとする。そしてコスモスの根源的聖性を介して自己理解を成立させる。聖性をめぐる文化的営為は、哲学的言説、芸術的表象、さらには民俗芸能といった広範な文化領域にわたっている。日本人のメンタリティーには事挙げせぬ無名の精神性ともいえるべき、聖性に対する鋭い感受性があるように思われる。こうした聖性に対する感受性は「細部にこそ神が宿る」という民俗的美意識と結びついて、繊細な日本文化を創り上げてきた。

ゼミでは、聖性をめぐる文化に関することであれば日本に限らず各自の関心にしたがってどんなテーマを扱ってもよい。

精神文化論ゼミ（ナラティブ研究）（春期・秋期）

担当教員：安藤 文人

学期：春秋学期 曜日時限：火5時限 配当年次：3年以上

現代人の様々な生の有り様、精神の営みにおいて、広義におけるナラティブ（物語）が果たす役割を、特にその構造的な側面に注目して考察する。まず文学、言語学などの分野を中心に、言説／テキスト／ナラティブ分析に用いられる様々な方法・概念・用語などを一覧し、そのうえで、主に次のような3つのアプローチに基づいてケーススタディーを行う。

1. 自伝、体験記、日記など「自分語り」のジャンルに属するナラティブをとりあげ分析を行う。
2. 小説を中心とする文芸作品をとりあげ、テキストと読者との相互作用の中で、どのように「生」の言説／ナラティブ化が図られていくかを探索する。
3. メディアなどで流布している（あるいは流布した）特定の言葉、言説（流行語、クリシェ、スローガン、キャッチ・コピーなど）をとらえ、そこから社会状況とそこで構成されるナラティブについて検討する。

精神文化論ゼミ（ジェンダーとセクシュアリティの視座）（春期・秋期） A

担当教員：草野 慶子

学期：春秋学期 曜日時限：火5時限 配当年次：3年以上

ゼミは5限、6限連続で行われる。

5 限は、原則として 3・4 年生合同ゼミとし（ゼミ A と称する）、主に文献講読、そして 3 年生による共通テーマに関する発表を行い、6 限は 4 年生のみのゼミ論指導を行う（ゼミ B と称する）。

よって、3 年生は（あくまで原則として）5 限のみの出席、4 年生は、5・6 限連続で出席すること。

ただし、5 限の時間帯は、定められた刻限を超えて延長する場合があります。3 年生はその旨、了解の上、履修計画を立てること。月曜日の 6 限に他科目を登録しないでください。ご注意！

ゼミ A（5 限 3・4 年生合同）

ゼミは 2 年間継続して行われる。

今年度の予定は以下の通り。

2015 年度春期

「性とアイデンティティ」；性の多様性

「エロスをめぐって」；身体とこころ

2015 年度秋期

「不死をめぐって」；医療、健康、美容、その他

「ユートピアをめぐって」；共同体と個人、ジェンダーとセクシュアリティ

精神文化論ゼミ（ジェンダーとセクシュアリティの視座）（春期・秋期） B

担当教員：草野 慶子

学期：春秋学期 曜日時限：月 6 時限 配当年次：3 年以上

ゼミは 5 限、6 限連続で行われる。

5 限は、原則として 3・4 年生合同ゼミとし（ゼミ A と称する）、主に文献講読、そして 3 年生による共通テーマに関する発表を行い、6 限は 4 年生のみのゼミ論指導を行う（ゼミ B と称する）。

よって、3 年生は（あくまで原則として）5 限のみの出席、4 年生は、5・6 限連続で出席すること。

ただし、5 限の時間帯は、定められた刻限を超えて延長する場合があります。ご注意！

ゼミ B（6 限 4 年生のみ）

各自のゼミ論指導を行う。

関係構成論ゼミ（プラクティカル・エシックス）（春期・春期） — 現代社会問題の倫理的性格を把握する

担当教員：御子柴 善之

学期：春秋学期 曜日時限：木 5 時限 配当年次：3 年以上

私たちは、ともに生きている。すなわち、他の人間と関係を持ち、関係を構成しながら生きている。そこに人間関係（自分自身への関係を含む）を規制する行為規範（「きまり」）が生まれ機能することになるが、この行為規範に対して問いを向け、その根拠に対して問い抜くのがこのゼミの内容である。

さて、行為規範は日常的には明確に意識されていない。それが意識されるのは、往々にして私たちが自分の生きる社会に道徳的問題（環境問題、医療問題、介護問題など）を見出したときである。この観点から、行為規範への問いは、「私たちの社会はどうあるべきか」という問いを誘発するだろう。他方、道徳的問題の意識は、そもそも行為規範とは何で、その正当性・妥当性はどのようにやって保証できるのか、という問いをも生み出す。したがって、このゼミは、一方で、現代社会の固有の性格ならびにその道徳的問題を的確に把握し、その解決の方向性を目掛けて考え抜く研究と、他方で、道徳的問題の抽象的な根拠を考え抜いて、哲学的思惟の蓄積に接続する研究の二面をもつことになる。

春期は、一冊の著作を輪読するとともに、いくつかのグループ研究を組織し、グループ発表を準備・実施する。（秋期も同様の作業を行う。）また、参加者が海外文献・新聞記事から見つけた倫理問題の紹介を紙面で行う。4 年生には、授業時間外にゼミ論文指導を行う。

関係構成論ゼミ（生命と人格）（春期・秋期）— バイオテクノロジーや IT の進歩と影響に直面して現代の人間を考える

担当教員：村松 聡

学期：春秋学期 曜日時限：木 5 時限 配当年次：3 年以上

現代人間論系、関係構成論プログラムの一つに位置づけられるゼミです。

バイオテクノロジーと IT は、21 世紀の花形技術であるといわれています。しかしその急速な発展と普及とともに、私たちは人間とは何かを再考する必要性に迫られています。

人間の身体、コミュニケーションのあり方など現代の倫理が直面する具体的問題を取り上げながら、人間とはなにか、深く考えていくための倫理的、哲学的視点と方法を身につけます。

関係構成論ゼミ（社会の変化と人間関係）（春期・秋期） A — 社会の変化と人間関係

担当教員：石田 光規

学期：春秋学期 曜日時限：月 3 時限 配当年次：3 年以上

私たちの人間関係は社会の変化とともに大きく姿を変えてゆきます。戦後の高度経済成長とともに、その希薄化が長い間指摘されてきました。このゼミでは社会の変化と人間関係をテーマに、今後の関係構築、関係形成、善き社会のあり方について考察してゆきます。そのさい、特定の領域に絞り実証的に調査をしつつ、問題に迫るアプローチをとります。2015 年度は個人化が進む社会における人間関係、地域社会における関係の再編について焦点を当てる予定です。

関係構成論ゼミ（社会の変化と人間関係）（春期・秋期） B — 社会の変化と人間関係

担当教員：石田 光規

学期：春秋学期 曜日時限：月 4 時限 配当年次：3 年以上

私たちの人間関係は社会の変化とともに大きく姿を変えてゆきます。戦後の高度経済成長とともに、その希薄化が長い間指摘されてきました。このゼミでは社会の変化と人間関係をテーマに、今後の関係構築、関係形成、善き社会のあり方について考察してゆきます。そのさい、特定の領域に絞り実証的に調査をしつつ、問題に迫るアプローチをとります。2015 年度は個人化が進む社会における人間関係、地域社会における関係の再編について焦点を当てる予定です。

人間発達論ゼミ（現代人のライフストーリー）（春期・秋期） A

担当教員：大久保 孝治

学期：春秋学期 曜日時限：金 5 時限 配当年次：3 年以上

ゼミのテーマである「ライフストーリー」には 2 つの意味がある。1 つは、個人が語る（書く）自分自身の人生の物語であり、もう 1 つは、ポピュラーカルチャー（小説、映画、TV ドラマ、アニメ、漫画、歌曲、CM など）の中に遍在するさまざまなタイプの人生の物語である。個人は自分自身の人生の物語を語る（書く）ときに、後者を

モデルとして利用している（あるいは無意識のうちに影響を受けている）。授業では、両者をともに研究の対象とする。現代という状況の中で、人々はどのように自分の人生を語っているのか、意味づけているのか、その意味付けに根拠を与えているものは何なのか、そうした問いをめぐって、現代人の人生の困難と希望について考えていきたい。研究に必要な方法論として、社会学と心理学（とくに自己心理学・発達心理学）に重点を置いて勉強していく。

言うまでもないことだが、ゼミは協働作業の場である。「現代人のライフストーリー」というテーマや、社会学や心理学に関心があるというのは、ゼミ生の最低限の共通事項で、関心の具体的な広がり方はさまざまであろう。性格が十人十色であることはいうまでもない。そういう学生たちがゼミという公共圏を形成・維持していくためには、ゼミというプロジェクトを推進していくためには、協調性やコミュニケーション能力が必要とされる。ゼミでの2年間の活動は、最終的には、ゼミ論としてまとめられる。ゼミで鍛え上げた「読む」「語る」「聴く」「議論する」「書く」という一連の知的能力は、卒業後どのような進路に進むのであれ、必ず役に立つはずである。

人間発達論ゼミ（現代人のライフストーリー）（春期・秋期） B

担当教員：大久保 孝治

学期：春秋学期 曜日時限：金 6 時限 配当年次：3 年以上

ゼミのテーマである「ライフストーリー」には2つの意味がある。1つは、個人が語る（書く）自分自身の人生の物語であり、もう1つは、ポピュラーカルチャー（小説、映画、TVドラマ、アニメ、漫画、歌曲、CMなど）の中に遍在するさまざまなタイプの人生の物語である。個人は自分自身の人生の物語を語る（書く）ときに、後者をモデルとして利用している（あるいは無意識のうちに影響を受けている）。授業では、両者をともに研究の対象とする。現代という状況の中で、人々はどのように自分の人生を語っているのか、意味づけているのか、その意味付けに根拠を与えているものは何なのか、そうした問いをめぐって、現代人の人生の困難と希望について考えていきたい。研究に必要な方法論として、社会学と心理学（とくに自己心理学・発達心理学）に重点を置いて勉強していく。

言うまでもないことだが、ゼミは協働作業の場である。「現代人のライフストーリー」というテーマや、社会学や心理学に関心があるというのは、ゼミ生の最低限の共通事項で、関心の具体的な広がり方はさまざまであろう。性格が十人十色であることはいうまでもない。そういう学生たちがゼミという公共圏を形成・維持していくためには、ゼミというプロジェクトを推進していくためには、協調性やコミュニケーション能力が必要とされる。ゼミでの2年間の活動は、最終的には、ゼミ論としてまとめられる。ゼミで鍛え上げた「読む」「語る」「聴く」「議論する」「書く」という一連の知的能力は、卒業後どのような進路に進むのであれ、必ず役に立つはずである。

人間発達論ゼミ（子どもの関係発達論）（春期・秋期）

担当教員：大藪 泰

学期：春秋学期 曜日時限：木 5 時限 配当年次：3 年以上

子どもの発達とは2つの視点からとらえることができる。発達を個体の視点からとらえようとするものと、個体間の関係という視点からとらえようとするものである。ここでの関係とは、相手の心の世界への気づき（メンタライジング）にもとづく間主観的な関わりをさしている。このゼミでは、こうした人間に特有な関係性のなかに反映される個体能力を踏まえつつ、他者との関係的なやり取りが生み出してくる子どもの心の発達について心理学の視点から検討してみたい。子どもの心がいかに他者との関係を必要とするか、それはなぜなのか、そしてそれはどんな形態をとるのか。子どもと他者との関係の世界を丁寧に解き明かす努力を一緒にしながら、子どもの心の不思議さに出会い、子どもの心を豊かに育てるものは何かを探してみよう。

ゼミで対象とする子どもは、定型発達をする健常児と非定型発達をする発達障害児である。定型発達と非定型発達を隔年で取り上げるので、3年生と4年生の2年間でどちらのタイプの子どもの関係発達についても学ぶことができる。

春期には、文献を読み、発表し、ディスカッションしながら、子どもの関係発達を理解する。本年度は、非定型発達として自閉症児の関係発達を取り上げる。

人間発達論ゼミ（現代人の心理）（春期・秋期）

担当教員：小塩 真司

学期：春秋学期 曜日時限：木 5 時限 配当年次：3 年以上

現代人特有の心理的発達とは、どのようなもののだろうか。このゼミでは、人びとの心理的個人差（性格・パーソナリティの側面や認知的側面）を重視しつつ、現代社会を生きる人びとに共通する発達の变化について検討する。発達時期に関しては、青年期以降の時期に注目する。

人間の性格にはどのような次元があるのか、どのように把握されるのか、どこにその起源があるのか、どのように変化していくのか、なぜ特定の性格の持ち主が適応・不適応状態に陥るのか。ゼミでは大きくこのような問題意識を持ちつつ、より詳細な個別の問題に取り組みたい。

福祉社会論ゼミ（教育福祉・福祉文化論）（春期・秋期） A-「子どもの貧困」の克服と福祉・教育・文化の権利

担当教員：増山 均

学期：春秋学期 曜日時限：火 3 時限 配当年次：3 年以上

子どもから高齢者まで生涯にわたっての福祉と教育と文化の結合の問題をとりあげる。なかでも特に子ども（乳幼児期・児童期・青少年期）の成長と発達への注目を中心課題とする。今日「子どもの貧困」が社会問題となっているが、子どもの豊かな成長のためには、生活保障（福祉）と発達保障（教育）の統一、さらには子ども主体の文化との結合が欠かせない。しかし、現実には社会制度的に子どもの福祉と教育と文化は分断され、発達と自立に向けての環境が阻害されている。このゼミナールでは、①子どもの権利保障の基礎理念を学ぶとともに、②学校教育・社会教育の制度や実践を知り、③児童福祉の制度やサービスの実際を理解すること、④子どもの文化・芸術にかかわる諸実践を広く視野に入れ、⑤三者の分断の谷間にある問題、いまだ正面から光が当てられていない問題（たとえば、不登校の子どもと学習権保障問題、学童保育と放課後問題、子どもの貧困と児童養護問題、幼保一元化と子ども子育て支援新制度問題）や、三者の統合を目指す新しい実践としてのスクールソーシャルワーク、子どもの居場所づくり、フリースクールのとりくみ、子どもの遊び・遊び場づくりとプレイワークなどに学びながら、「教育福祉」「福祉文化」「子どもの権利保障」概念の今日的意義について学ぶ。

以上の諸問題を考えるにあたって、具体的なとりくみに接し・関わる中で実践的に学ぶことが大切なので、「子ども」「高齢者」「世代間交流」にかかわる福祉・教育・文化施設、市民 NGO・NPO・ボランティア団体のとりくみに関する見学・調査・交流を位置づける。東京都中野区の「なかの生涯学習大学」（公的社会教育の講座）で学ぶ高齢者と交流し、合同ゼミナールの機会を持つ。また東京都板橋区成増社会教育館での講座に参加して、教育・福祉・文化の連携についての取り組みを実践的に学ぶ。

福祉社会論ゼミ（教育福祉・福祉文化論）（春期・秋期） A－「子どもの貧困」の克服と福祉・教育・文化の権利

担当教員：増山 均

学期：春秋学期 曜日時限：火 4 時限 配当年次：3 年以上

子どもから高齢者まで生涯にわたっての福祉と教育と文化の結合の問題をとりあげる。なかでも特に子ども（乳幼児期・児童期・青少年期）の成長と発達への注目を中心課題とする。今日「子どもの貧困」が社会問題となっているが、子どもの豊かな成長のためには、生活保障（福祉）と発達保障（教育）の統一、さらには子ども主体の文化との結合が欠かせない。しかし、現実には社会制度的に子どもの福祉と教育と文化は分断され、発達と自立に向けての環境が阻害されている。このゼミナールでは、①子どもの権利保障の基礎理念を学ぶとともに、②学校教育・社会教育の制度や実践を知り、③児童福祉の制度やサービスの実態を理解すること、④子どもの文化・芸術にかかわる諸実践を広く視野に入れ、⑤三者の分断の谷間にある問題、いまだ正面から光が当てられていない問題（たとえば、不登校の子どもと学習権保障問題、学童保育と放課後問題、子どもの貧困と児童養護問題、幼保一元化と子ども・子育て支援新制度問題）や、三者の統合を目指す新しい実践としてのスクールソーシャルワーク、子どもの居場所づくり、フリースクールのとりくみ、子どもの遊び・遊び場づくりとプレイワークなどに学びながら、「教育福祉」「福祉文化」「子どもの権利保障」概念の今日的意義について学ぶ。

以上の諸問題を考えるにあたって、具体的なとりくみに接し・関わる中で実践的に学ぶことが大切なので、「子ども」「高齢者」「世代間交流」にかかわる福祉・教育・文化施設、市民 NGO・NPO・ボランティア団体のとりくみに関する見学・調査・交流を位置づける。東京都中野区の「なかの生涯学習大学」（公的社会教育の講座）で学ぶ高齢者と交流し、合同ゼミナールの機会を持つ。また東京都板橋区成増社会教育館での講座に参加して、教育・福祉・文化の連携についての取り組みを実践的に学ぶ。

福祉社会論ゼミ（ディスアビリティと現代）（春期・秋期） A

担当教員：岡部 耕典

学期：春秋学期 曜日時限：金 3 時限 配当年次：3 年以上

ディスアビリティを切り口として現代と福祉社会の在り方について考えるゼミです。

「障害(disability)は社会的に構築されている（個人の属性ではない）」という考え方を「障害の社会モデル」と呼びます。イギリスの障害当事者運動から生まれたこの新しい障害観は、格差・貧困・差別・社会的排除などの現代社会の諸問題の解決を、“できなくされている人(disabled person)”の自己責任へと還元せず社会の側に対応を求めるポリティクスとしても有効です。本ゼミではこの「障害の社会モデル」を手がかりとし、加速する新自由主義と閉塞する福祉国家を交響する公共圏へと再構築するために必要な「自由の平等」と新たな福祉のかたち（ケア・運動・政策・制度的再分配）について読み／調べ／考えていきます。

春期は、文献講読とディスカッションによって、研究を進めるうえで必要な基本概念や理論について学びます。

福祉社会論ゼミ（ディスアビリティと現代）（春期・秋期） B

担当教員：岡部 耕典

学期：春秋学期 曜日時限：金 3 時限 配当年次：3 年以上

ディスアビリティを切り口として現代と福祉社会の在り方について考えるゼミです。

「障害(disability)は社会的に構築されている（個人の属性ではない）」という考え方を「障害の社会モデル」と呼びます。イギリスの障害当事者運動から生まれたこの新しい障害観は、格差・貧困・差別・社会的排除などの現代社会の諸問題の解決を、“できなくされている人(disabled person)”の自己責任へと還元せず社会の側に対応を求めるポリティクスとしても有効です。本ゼミではこの「障害の社会モデル」を手がかりとし、加速する新自由主義と閉塞する福祉国家を交響する公共圏へと再構築するために必要な「自由の平等」と新たな福祉のかたち（ケア・運動・政策・制度的再分配）について読み／調べ／考えていきます。

春期は、文献講読とディスカッションによって、研究を進めるうえで必要な基本概念や理論について学びます。

2015年度春学期時間割

時限	月	火	水	木	金	無フルOD
1		発達障害の心理臨床:長田 洋和			児童家庭福祉論:増山 均	福祉サービスの組織と経営:鷹野 吉章 ことばと人間:田中 ゆかり
					福祉文化論:多田 千尋	
					ジェンダーを知る:杉浦 郁子	
2	現代人間論系演習(親密圏の論理と倫理):石田 光規	消費社会論:柄本 三代子	現代人間論系演習(ジェンダーと福祉):熱田 敬子	現代人間論系演習(現代人と職業):石田 光規	哲学的人間学:田原 彰太郎	
		個性の発達と差異:小塩 真司			ソーシャルワーク概論:阿比留 久美	
		現代人間論系演習(身体技法論):鈴木 無二			現代人間論系演習(モダン・ソサイエティ研究):高橋 透	
		現代人間論系演習(個人化の社会学):大久保 孝治				
3	関係構成論ゼミ(社会の変化と人間関係)(春期) A:石田 光規	障害学:星加 良司		キリスト教と祝祭:田島 照久	福祉社会論ゼミ(ディスアビリティと現代)(春期) A:岡部 耕典	
	現代人間論系演習(自己形成と無我):越川 房子	現代人のライフスタイル:大久保 孝治		ナラティブの理論:安藤 文人		
	ユートピアと性:草野 慶子	現代人間論系演習(青年期における逸脱行動):茂垣 まどか				
	現代人間論系演習(宗教と共同体):田島 照久	精神文化論ゼミ(聖性文化論)(春期) A:田島 照久				
		福祉社会論ゼミ(教育福祉・福祉文化論)(春期) A:増山 均				
4	関係構成論ゼミ(社会の変化と人間関係)(春期) B:石田 光規	論理的思考法:小口 裕史	社会保障と現代:堅田 香緒里	コミュニケーション論:石田 光規	福祉社会論ゼミ(ディスアビリティと現代)(春期) B:岡部 耕典	
	現代人間論系演習(心をしらべる):増井 啓太	子どもの発達心理学:大藪 泰		現代人間論系演習(心をみる):大藪 泰		
	現代人間論系演習(道徳意識の研究):村松 聡	現代人間論系演習(現代人と家族):久保田 裕之				
		現代人間論系演習(不死の様式):草野 慶子				
		精神文化論ゼミ(聖性文化論)(春期) B:田島 照久				
		福祉社会論ゼミ(教育福祉・福祉文化論)(春期) B:増山 均				
5	応用倫理学:村松 聡	現代人間論系総合講座1(現代人の精神構造):大藪 泰 他@石田 光規@草野 慶子@村松 聡		日常生活の社会学:大久保 孝治	キリスト教概説:阿部 善彦	
	現代人間論系演習(近代の人間観の論理と倫理):御子柴 善之	現代人間論系演習(心と物語):安藤 文人		現代人間論系演習(現代人と福祉):畑本 裕介	現代人間論系演習(現代の人間観の論理と倫理):村松 聡	
	精神文化論ゼミ(ジェンダーとセクシュアリティの視座)(春期) A:草野 慶子	現代人間論系演習(調査データ収集・分析の手法):小藪 明生		関係構成論ゼミ(ブラクティカル・エシックス)(春期):御子柴 善之	人間発達論ゼミ(現代人のライフストーリー)(春期) A:大久保 孝治	
		精神文化論ゼミ(ナラティブ研究)(春期):安藤 文人		関係構成論ゼミ(生命と人格)(春期):村松 聡		
		人間発達論ゼミ(現代人の心理)(春期):小塩 真司		人間発達論ゼミ(子どもの関係発達論)(春期):大藪 泰		
6	現代人間論系演習(宗教と言語):鶴岡 賀雄	コミュニティ福祉論:常数 英昭	グローバル化と日常生活:入江 正勝	現代人間論系演習(現代社会とセラピー文化):小塩 真司	現代人間論系演習(いじめ・虐待と社会病理):竹原 幸太	
	精神文化論ゼミ(ジェンダーとセクシュアリティの視座)(春期) B:草野 慶子	現代人間論系演習(セクシュアリティ研究の実践):黒岩 裕市		現代人間論系演習(ケアと支援の福祉社会学):深田 耕一郎	現代人間論系演習(福祉サービスと施設運営):金高 茂昭	
	現代人間論系演習(表現を生きる):宮本 明子	西洋近代思想:浜野 喬士		ネットワークの社会学:小藪 明生	人間発達論ゼミ(現代人のライフストーリー)(春期) B:大久保 孝治	
					人間発達論ゼミ(クリエイティブ現代社会論)(春期):高橋 透	

※時間割は変更になる場合があります。各自で随時、確認してください。

2015年度秋学期時間割

時限	月	火	水	木	金	無フルOD
1		現代人間論系演習(生の詩学／生の解釈):草野 慶子			現代人間論系演習(子どもの福祉と子育て支援):増山 均	
	社会倫理学:御子柴 善之				ポストヒューマン思想:高橋 透	
					現代人間論系演習(ユングの分析心理学):前田 正	
2	現代人間論系演習(現代人のアイデンティティの心理):茂垣 まどか	現代人間論系演習(「わたし」を読む):安藤 文人	現代人間論系演習(フロイトの精神分析論):吉村 聡	福祉理論と社会政策:平野 寛弥	現代人間論系演習(現代日本と宗教):塩月 亮子	
		現代人間論系演習(世代間交流の理論と実践):増山 均		現代人間論系総合講座2(生命の尊厳と生活の質):村松 聡 他@安藤 文人@岡部 耕典@小塩 真司	現代人間論系演習(生命・医療の論理と倫理):村松 聡	
		キリスト教図像学:益田 朋幸			現代人間論系演習(高度テクノロジー社会への視座):高橋 透	
3	関係構成論ゼミ(社会の変化と人間関係)(秋期) A:石田 光規	情報社会論:石田 光規		宗教思想:田島 照久	現代人間論系演習(消費社会の論理と倫理):水原 俊博	
	現代人間論系演習(ジェンダー研究の実践):徳永 夏子	精神文化論ゼミ(聖性文化論)(秋期) A:田島 照久		現代人間論系演習(ナラティブ分析の実際):安藤 文人	生命倫理:村松 聡	
	大人の発達心理学:茂垣 まどか	福祉社会論ゼミ(教育福祉・福祉文化論)(秋期) A:増山 均			福祉社会論ゼミ(ディスアビリティと現代)(秋期) A:岡部 耕典	
	現代人間論系演習(実存と他者の倫理):村松 聡					
4	関係構成論ゼミ(社会の変化と人間関係)(秋期) B:石田 光規	精神文化論ゼミ(聖性文化論)(秋期) B:田島 照久		現代人間論系演習(福祉社会の臨界):岡部 耕典	人間の発達と進化:福川 康之	
	福祉社会論:岡部 耕典	論理学:小口 裕史		社会変動論:田辺 龍	福祉社会論ゼミ(ディスアビリティと現代)(秋期) B:岡部 耕典	
	現代人間論系演習(環境問題の論理と倫理):御子柴 善之	現代人間論系演習(ケーススタディの方法):小藪 明生		現代人間論系演習(発達の生得性と環境効果):大藪 泰		
		福祉社会論ゼミ(教育福祉・福祉文化論)(秋期) B:増山 均				
5	現代人間論系演習(企業行動の論理と倫理):斎藤 豊	人間の発達と文化:大藪 泰	現代人間論系演習(ジェンダー論の論理と倫理):熱田 敬子	現代人間論系演習(クワイ・スタディーズ):飯野 由里子	福祉環境デザイン論:秋山 哲男 他@水村 容子	
	精神文化論ゼミ(ジェンダーとセクシュアリティの視座)(秋期) A:草野 慶子	精神文化論ゼミ(ナラティブ研究)(秋期):安藤 文人	愛と性の現象学:古永 真一	人間発達論ゼミ(子どもの関係発達論)(秋期):大藪 泰	現代テクノロジーからサイボーグ技術へ:高橋 透	
		人間発達論ゼミ(現代人の心理)(秋期):小塩 真司		ライフストーリーの社会学:大久保 孝治	現代人間論系演習(ひきこもりの社会学):関水 徹平	
				現代人間論系演習(子育ての文化比較):根ヶ山 光一	人間発達論ゼミ(現代人のライフストーリー)(秋期) A:大久保 孝治	
				関係構成論ゼミ(プラクティカル・エシックス)(秋期):御子柴 善之		
				関係構成論ゼミ(生命と人格)(秋期):村松 聡		
6	精神文化論ゼミ(ジェンダーとセクシュアリティの視座)(秋期) B:草野 慶子	現代人間論系演習(サイバー空間の論理と倫理):石田 光規	権利擁護と成年後見制度:松友 了 他@大石 剛一郎@崔 榮繁@星野 美子	ソーシャル・コンストラクショニズム入門:張江 洋直	人間発達論ゼミ(現代人のライフストーリー)(秋期) B	
	現代人間論系演習(社会福祉の論理と倫理):御子柴 善之	高齢者問題と生活支援:河合 克義		現代人間論系演習(科学技術の論理と倫理):西川 麻樹	人間発達論ゼミ(クリエイティヴ現代社会論)(秋期):高橋 透	
				ソーシャル・キャピタル論:小藪 明生		

※時間割は変更になる場合があります。各自で随時、確認してください。

2014年度現代人間論系卒研・ゼミ論一覧

精神文化論 プログラム	「ニューベリングの指環」の結末に見るワーグナーの思想の変遷と芸術論
	供物論研究—供犠は制度化された暴力か—
	人格崇拜論における社会統合へのまなざし
	民族医療をいかに利用するか—健康の脱医療化—
	『ハムレット』と亡霊
	現代における「癒し」の諸相とその有用性
	富士講の興隆となぜ衰退してしまったのか
	女性の自己実現に関する諸問題
	家庭における男女平等と役割の変遷
	大都市・都市近郊農業地帯・中山間地の比較からみる子育て環境の現在
	同性パートナーシップの展望
	多様なパートナーシップを目指して
	制度化された男女の出会い
	性的嗜好の観点から考える『性の多様性の共存社会』
	メディアが構築するジェンダー像
	アニメ作品に表象されるジェンダー構造
	ヤオイとジェンダー
	スポーツメディア作品におけるジェンダー
	雑誌『オリブ』が少女たちに遺したもの
	美しい身体—痩せたい気持ちの正体—
	自己表現の自由と、社会のジェンダー観念の関係性についての一考察—ファッション/マリリン・モンローから—
	「田中将大」にみるヒーローの物語—メディアと価値観の理想像—
	スポーツのルールからみる「美しさ」への希求—体操競技を例に—
	演説における自己呈示
	商品という「語りえぬもの」—「語りえぬもの」をまなざすということ—
	リーダーの自伝から読み取るL'Arc-en-CielとGLAYの物語
	ひめゆり学徒隊にみる歴史の伝承
	ワセジョ論
	Twitterに表れる現代のコミュニケーション—大学生へのインタビュー調査を通じて—
	音の切り貼りとその価値—リミックスにおける「作者」—
	物語の反復／反復の物語
	太宰治『人間失格』論—自伝的小説の背景を探る—
	レディー・ガガというテキスト—他者の視線が自己語りにもたらす影響—
	AKB48と物語化
	「なんとなく嫌い」を明らかにする—新聞の中国報道をもとに—
関係構成論 プログラム	異文化交流における他者理解のために
	超高齢社会における認知症との向き合い方について
	コーポレート・ガバナンスの将来展望—企業不祥事をなくし、かつ企業競争力を高めるための今後の戦略提言—
	現代社会の労働環境におけるストレス
	「言語ゲーム」を論じることの難しさ
	豊かな人間を育てるために—家族のあるべき姿—
	スポーツマンを哲学する—ありのままのスポーツマンでいるためには—
	「道徳」の起源
	人道的介入の道徳的意義はどこにあるか—正戦論の歴史から見た世界市民的アプローチの探求—
	システム哲学について
	なぜ貧困に苦しむ国の人々を助けなければならないのか—グローバル倫理から考える普遍的正義—
	「すき家」における労働環境の実態—労働者の権利を守る為にどうすべきか—
	未来世代への倫理—義務の根拠と内容、範囲を巡って—
	ITと監視—収集される個人データと個人が結びつく—
	販売員の顧客への倫理—顧客を食い物にしないために—
	自己の構造について—木村敏の精神分裂病分析—
	エンハンスメント問題に対する一考察—人間の主体性に対する侵害とそれに伴う社会的諸問題—
	自然科学による自由と意識の解明
	承認という原理—アクセル・ホネットの承認論—
	パラサイト化から自立した人生へ—若者が希望に満ちた生活を送るために—
	〈生きる意味〉の倫理と資本主義の精神・序説—未来構想のための哲学＝社会(科)学—
	日本の脱貧困化に向けて
	男性の育児参加—「イクメン」が家族・社会を変える—
	恋愛における関係性の多様化—なぜ、ひとは「純愛」に惹かれるのか—
	現代人の友人関係—「つながり」を再考する—
	生き方の幅を広げるキャリア教育
	認知症を持つ人の自己物語—「呆けたら終わり」を乗り越える—
	人口移動と地域間格差—若者が希望を持てる地域づくりのために—
	ケータイ・コミュニケーションの未来—「ケータイストレス」のその先へ—
	はじまりのコミュニケーション—リアルとネット空間の共演—
	現代人における読書—本に未来はあるのか—
	変容する若者の消費特性—未来の消費社会の構想に向けて—
	不良への憧れと脱不良への欲求—不良作品を通して—
	現代日本における〈ケア圏・生活圏・親密圏〉と家族機能の充足

人間発達論 プログラム	求められる道徳教育—よりよく生きていくために—
	現代人の自己像の変容—統合された自己から多元的な自己へ—
	現代人における「家族」とは何か
	ポスト3.11、こどもとどう寄り添うか
	子どもの想像力と発達—「想像上の友達」を通して—
	子どもの発達と玩具—シルバニアファミリー考察—
	家族風景から見る子どもの食卓事情
	子どもを癒す遊びの力—遊戯療法を通して—
	ADHDの療育—学童期の子ども—
	人をなぜ遊ぶのか—遊ぶ子どもの世界—
	日本の子どもの自尊感情の低さと要因について
	子どものパーソナリティ発達—他者との関わりを通じて—
	自ら命を絶つ子ども—日本の子どもの「自殺」—
	指導者はどう変わるべきか—子どものためなのか、指導者の自己満足のためなのか—
	日本におけるインクルーシブ教育の可能性—求められる専門教育—
	子どもといのち—いのちの概念の獲得と経験の作用—
	子どもの暴力行為—なぜ子どもは「キレやすい」のか—
	第一反抗期における親子の心理発達
	凶悪犯罪者はなぜ生まれるのか
	対人葛藤場面に対する多面的検討—本来感、統合的葛藤解決、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求を用いて—
	「良い子」と完全主義の関連について—「良い子」のイメージとその構造に基づく「良い子」尺度の作成—
	“役職付与”が所属サークルへの満足度に影響を及ぼすプロセスに関する研究
	—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる検討—
	日本の就職活動について—コレスポネンズ分析を用いた現状分析—
	炎上ツイートに対する感情評定と個人特性の関連—パーソナリティと仮想的有能感に着目して—
	大学生の就職に対するイメージと職業未決定との関連
	服装イメージとパーソナリティの関連—服装を手がかりとしたパーソナリティ認知と本人のパーソナリティに注目して—
	身体的特徴が他者に与える印象—身長と肌色に着目して—
	大学生の高齢者意識と向社会的行動・本来感・目上からの受容との関連
	高校から大学への移行における意識の変化
	大学生における習慣行動とパーソナリティの関連
	就職活動中の情報探索行動およびインターンシップが内定獲得前の就職不安低減に及ぼす効果
	就職活動がキャリア成熟に及ぼす影響について—文系学生の就職活動に注目して—
	きょうだいに対するステレオタイプの保持と生まれつきの関係
	俳優を志す者の演技方法と日常生活における演技の相関
	きょうだい構成によるパーソナリティの印象
福祉社会論 プログラム	障害者とともにつくる地域福祉—福祉教育と交流活動から考える—
	コミュニティ・スクールに学ぶ—これからの学校の役割と可能性とは—
	官民共同による問題解決の新たな道筋—NPO先進性とプラットフォーム性に注目して—
	学校給食の現状と課題—食育活動を通じた地域のつながり、そして文化の継承へ—
	日本人の休暇観について
	高齢者福祉における遊びの力—楽しく年をとるために—
	子どもの道草—地域づくりとつながりの再構築
	若者ホームレスと自立支援—孤立・無縁・難民からの脱却—
	遊びで育つ子どもたち—プレイパークに学ぶ遊び環境づくり—
	若者の孤独感と現代社会—孤独感の二面性に注目して—
	ハンセン病の記憶を残すために—ハンセン病問題を考える—
	母子家庭と子どもの貧困—貧困の連鎖を断ち切るために—
	限界集落から見る地域再生—暮らしの存続・文化の継承—
	障害児幼児の発達を保障するために—地域におけるネットワークづくり—
	生得的環境から生じる子どもの格差はインターネットで埋まるのか
	ノルウェーの子育て観—子どもの権利と機会の平等に注目して—
	大学生のアスペルガー症候群—繋がり合いの必要性—
	セクシュアルマイノリティの子どもたち—生きづらさの現状とその展望—
	在日コリアン高齢者への支援の現状と課題—在日外国人高齢者への支援のあり方を考えるために—
	スポーツ障害を通して競技者を取り巻く環境を考える
	福祉へのまなざし—生活保護バッシングから見えてくるもの—
	ホームレスを生み出した社会とあるべき支援—THE BIG ISSUEとスーブの会から見る支援のバランス—
	子どもの自治が貫かれた自然体験活動の可能性—アニメーションを手がかりに見る—
	児童虐待における社会的養護の現状とその課題—これからの社会的養護のあるべき姿とは—
	「障害の社会モデル」と内なる障壁—予測する不幸より振り返る幸福を—
	まなざされる身体—ユニークフェイス、見た目の問題を見つめ直す—
	ゆとり教育は否定されるべきものか—学習指導要領とPISAの結果からみるその是非—
	新卒一括採用制度はあるべきか—学生が前向きに就職するために今必要なこととは—
	早稲田大学におけるバリアフリー問題について—誰しにも開かれた学びの場としての大学とは—
	「障害者文化」の共生に向けた可能性
	ひとり親家庭の抱える問題とその支援—ひとり親家庭が自立するには—
	セクシュアル・マイノリティのカミングアウト—性の多様性が認められる社会を目指して—
	教育と職業の関係史—キャリア教育を端緒として—（岡部ゼミ論文集未収録、HPのみ掲載）

現代人間論系ホームページです。

講演会や読書会その他、論系にかかわりのある情報を発信しています。

助教・助手のいる論系室の情報もっていますよ。

早稲田大学 文化構想学部

現代人間論系

トップ | 早稲田大学 | 文化構想学部 | 論系紹介 | プログラム紹介 | 履修モデル | 過去記事

メニュー

▶ 教員紹介

▶ 現代人間論系時間割（春期）

▶ 現代人間論系時間割（秋期）

▶ ブログ

現代人間論系室

開室時間
月～木：12:00～18:00
金：12:00～20:00

お問い合わせ
TEL/FAX：
03-5286-3558(内線3382)
メール：
human@list.waseda.jp

場所
〒162-8644
東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学 戸山キャンパス
33号館701号室

What's new

◆大久保孝治先生主催読書会のご案内
◆「社会学基礎古典読書会（仮）」のご案内
◆5月23日開催「ハーヴェイ・ミルクを観る×考える」
◆6月4日開催「『セクハラ』の社会学——大学におけるハラスメントについて考える——」
◆講演会ちらしは[こちらからダウンロードできます](#)

◆在学生による現代人間論系ゼミ紹介（※2013年度情報）は[こちら](#)
◆現代人間論系TAの募集 [こちら](#)
◆[ブログ](#)もごらんください

◆過去に掲載した記事は[こちら](#)

在学生・教員の方へ

◆[カンファレンス室（702号室）使用・物品貸出について](#)

論系カンファレンス室 予約状況

今日 | ◀ | ▶ | 2014年 6月 | 印刷

日	月	火	水	木	金	土
6月 1日	2	3	4	5	6	7
	18:15 人間発達	14:45 福祉社会 16:30 福祉社会	14:00 論系公開	13:00 専門特選 16:30 関係構成	13:00 福祉社会 他 2 件	
8	9	10	11	12	13	14
	18:15 人間発達	13:00 精神文化 他 2 件	16:30 教室会議	13:00 専門特選 16:30 関係構成	13:00 福祉社会 他 2 件	
15	16	17	18	19	20	21
	18:15 人間発達	13:00 精神文化 他 2 件	16:30 ドイツ語	13:00 専門特選 16:30 関係構成	13:00 福祉社会 他 2 件	



👉 カンファレンス室（702 号室）の使用状況が一目で確認できます。

ふだんはゼミや読書会に使用しています。

32

HP とはまた別の、ブログ



HP のここからアクセスできます。

↓ここでいろいろな情報を掲載しています。背景のテンプレートもときどきかわります。

論系室だより

ー早稲田大学文化構想学部 現代人間論系の教員・助手からのメッセージー

『支援』Vol.4が発売されました

2014年05月31日 | 教員から(著書・論文・イベント等紹介)

[『支援』Vol.4——特集:支援で食べていく](#)

「支援」編集委員会＝井口高志・岡部耕典・土屋葉・出口泰靖・星加良司・三井さよ・山下幸子
【編著】／★特集 支援で食べていく／トークセッション 教育の中の支援、支援の中の教育
すぎむらなおみ×倉本智明 / ロングインタビュー 薬害エイズの被害者による当事者支援
——花井十伍に聞く / 生活書院 ISBN978-4-86500-025-2

岡部先生、出口先生も編集・執筆に関わられています。

岡部先生の特集基調論文をはじめ、
トークセッション、ロングインタビューと
在学生の皆さんにもぜひ読んでいただきたい内容が多数収録されています。



お知らせ

- 応募してみても？「ドコモ 未来ミュージアム」
- マクドナルドの略称はマック？それとも...
- 無料で安心、写真も便利！ goo ブログ♪
- goo ブログをさらに便利で快適に使うには？
- ♪「もっとブログを見て！」と思ったらアビール！

プロフィール

★読者になる

都道府県

東京都

自己紹介

早稲田大学文化構想学部 現代人間論系の教員・助手からのメッセージを発信しています

ログイン

編集画面にログイン

ブログの新規登録

goo おすすめ

今週のgoodなブログ！

ベルギー街角ウォッチング

現代人間論系には4つの柱があります。

ゼミ・演習テーマ

プログラム	演習・ゼミテーマ
精神文化論 (田島照久、安藤文人、草野慶子)	【ゼミ】 聖性文化論／ナラティブ研究／ジェンダーとセクシュアリティの視座
	【演習】 宗教と共同体／現代日本と宗教／宗教と言語／心と物語／ナラティブ分析の実際／生の詩学・生の解釈／ジェンダー研究の実際／表現を生きる／現代人のアイデンティティの心理／フロイトの精神分析論／ユングの分析心理学 など
関係構成論 (御子柴善之、村松聡、石田光規)	【ゼミ】 プラクティカル・エシックス／社会の変化と人間関係／生命と人格
	【演習】 道徳意識の研究／実存と他者の倫理／生命・医療の論理と倫理／環境問題の論理と倫理／企業行動の論理と倫理／サイバー空間の論理と倫理／消費社会の論理と倫理／科学技術の論理と倫理／身体技法論／ジェンダー論の論理と倫理 など
人間発達論 (大久保孝治、大藪泰、小塩真司、高橋透)	【ゼミ】 現代人のライフストーリー／子どもの関係発達論／クリエイティブ現代社会論／現代人の心理
	【演習】 ケーススタディの方法／現代人と家族／現代人と職業／現代社会とセラピー文化／発達の生得性と環境効果／心をみる／青年期における逸脱行動／自己形成と無我／子育ての文化比較／心をしらべる／モダン・ソサエティ研究／高度テクノロジー社会への視座 など
福祉社会論 (増山均、岡部耕典)	【ゼミ】 教育福祉・福祉文化論／ディスアビリティと現代
	【演習】 現代人と福祉／福祉社会の臨床／社会福祉の論理と倫理／いじめ・虐待と社会病理／子どもの福祉と子育て支援／ケアと支援の福祉社会学／ジェンダーと福祉／クイア・スタディーズ など

※上記はあくまで2015年11月時点でのプログラム・演習テーマの一覧です。